表紙, 目次, 漫錄, 抄錄, 雜報, 通信

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2017-10-04 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/38382

十全會雜誌

第六十三號

明治四十四年三月五日發行

金澤醫學專門學校十全會

十全會雜誌第六十三號目次

●故小原芳雄君肖像

○原著及實驗

●Der Nachweis von Tuberkelbazillen in tierischen Organen und in pathologischen Sekreten.
內臟及ビ病的產出液中ニ於ケル結核菌ノ証明方法。
ドクトル　河合　鷹氏

●晩近ニ於ケル結核病治療ノ進步。
東京醫科大學生理學教室
ドクトル　竹中繁次郎氏

○學會

●金澤醫學會。
○能登輪島海士町ニ於ケル脚氣病調査報告。
醫學博士　田中正一氏
ドクトル　吉田宗一氏
ドクトル　飯森益太郎氏
ドクトル　飯森益太郎氏
ドクトル　佐々木達氏
○特發性角膜脂肪變性ニ就テ。
○限局性皮膚浮腫ノ二例。
○六百六號ノ實驗ニ就テ。
○糖尿病ノ診斷。

○漫錄

●小原芳雄君を懐ふ。

○抄錄

●六〇六號の新溶解法。

○海外雜報

●エールリッヒ氏叙勲。●レントゲン教授の叙勲。●コッホ紀念碑。●ノートナーゲル氏。●フランツ、キョーニッヒ氏。●クレエンライン氏。●キュリー夫人。●獨逸諸大學の學生數。●女醫。●專門家。●ロックフエラー病院。

○內地雜報

●各學會總會期日。●北陸大學設立建議案。●新博士學位申請論文題●陸海軍醫藥劑官現在數。●日本青年の身長及体重。●越中富山の賣藥。●西尾病院落成式。

○醫校雜報

●醫專校長會議の問題。●醫專校と醫化學講座。●宮城病院落成式。●熊本醫專校建築工程。

○校內雜報

●十全會講話例會。●弓術射初式之記。

○通信

●豐橋同窓會通信。●京都校友通信。●日野信次氏通信。●松久祐馬氏の通信。●加藤錠吉氏通信二件。●井村勇作氏通信。●大西瀨治氏通信。●韓清泉氏通信。

○人事

●田中講師と紀念品。伊藤哲一氏。●笠間眞氏。●鈴木寛之助氏。●中野才幸氏。●大西瀨治氏。●太田長作氏。●田中義雄氏逝去。●本會員軍醫學校入學。●富田直氏。●福村深教氏。●關承五氏。●田山退一氏。●吉田圓磨氏。●池部正鑒氏逝去。

○會告

●校外十全會費納付調書。

○廣告

テ「サナトリユム」ヲ開キテヨリ、目下三百有余ノ多數ニ上ルニ至ツタ、併シ之等ノ「サナトリユム」ハ總テ中高山デ、最近ニ至ツテダボ―Davos村ノ治療所ガ高山治療ノ効果ヲ示シテヨリ、更ニ高山治療ノ大勢トナツテ來タ、元來氣候ノ關係カラ申セハ治療ヲ低地、山間、高山ノ三種トスル者デ、海拔三百メートル以下ハ低地治療、三百メートル以上八百メートル迄ハ山間療法、八百メートル以上千五百メートルニ至ル迄ヲ高山治療ト云ツテ居マス、茲ニ一言スヘキハ近時結核治療ニハ氣候ノ變動カ劇シイト困ルガ寒冷其者ヲ決シテ嫌ハナイ、反テ寒氣ハ咳痰ノ功力ヲ來スノミカ更ニ往々白雪ガ天地ヲ覆フテ空氣ヲ新鮮ニスルモノト信シラレテオル、事實、朔風膚ヲ掠ムル西比利亞ノ地ニモ良性ニ經過スル結核ノ流行地ヲ見、南部溫ナル伊太利ノ地ニモ惡性ニ經過スル結核ノ流行地ヲ認ムルソーナ、故ニ今日結核界ノ定論ハ寒暑ハ結核病ニ干與スル者ニ非ラスト信シラレテアル。

精神療法トハ精神ノ慰安ヲ計ル方法デ、結核患者ハ大概ひがみ根性ヲ持ツテ居ルカラ、種々ノ手段ヲ用ヒテ慰安ヲ與ヘネハナラヌ、デ、今日吾々ノ尤モ良策トスルノハ患者ト醫師トノ精神ノ觸接デ、醫師ノ側ヨリ申セハ自己ヲ信賴セシムル者、患者ノ側ヨリ申セハ醫師ヲ信賴スルノデアル。

冷水摩擦ハ皮膚ノ硬化、身体ノ硬化 Abhärtung ノ問題デ、吾人ノ經驗ニ徵スレハ溫浴ハ皮膚ヲ軟弱ナラシメ冷水浴ハ反テ硬化セシムル樣デアル、其他冷氣ハ体内代謝ニ影響シ、現ニ時トシテ食機ヲ促スコモ覆フベカラザル事實デアル、唯々其方法上注意スベキハ漸次小ヨリ大ニ、弱キヨリ强キニ至ラシムルコデ、漸進的ニ冷氣ヲ應用セシムルコデアル。

衣服ノ關係凡テ廣濶ヲ主トスルノデ、住居ハ凡テ衛生的ノ者ヲ宜シトスル。

体操術ハ將ニ進行セントスル結核患者ニハ禁忌デアルガ、陳慣ノ者ニハ勵行セシムルノデアル、余リ目下ノ處デハ患者ニ應用サレテ居ナイ。

（以下次號）

學會

◉金澤醫學會記事（二月十日）（文責ハ記者ニアリ）

改暦第一回ノ例回ヲ兼テ懇親會ヲ金谷舘上ニ開催ス、時ハ如月十日北陸ノ空何時ニナク晴レテ春陽ノ氣塲ニ溢レ快談笑語定刻ヲ過グル午後三時二十分、長宗我部副會長立ツテ開會ノ旨ヲ告ゲ高安會長用向ノ爲メ少時遲刻ノ由ヲ報ゼラレタリ、今左ニ其日程ノ大要ヲ錄センカナ。

○能登輪島海士町ニ於ケル脚氣病調査報告

田中正一氏
吉田宗一氏

田中氏立ツテ述ベテ曰ク、昨年秋季同地方脚氣蔓延シテ罹病者百參拾余名ニ達シ死者九名ヲ出シテ醫學會ノ一問題トナルヤ本縣ニテハ同二氏ヲ派シテ同病ノ調査ヲ命ゼラレ昨年十一月八日當地ヲ出發シ九日間ノ日數ヲ閲シテ同地ノ土地風俗生活狀態ヲ檢シ併ラ同病患者ノ診察ニ從事シテ原因及病狀等ヲ研メタリ、同島タルヤ海上ノ一孤島ニシテ海面ヲ出ヅル事最高八間何尺ノ濕地ニシテ雨天ニハ河水汎濫シテ不潔ヲ極メ島民ノ住居ハ一時的小屋懸ケニシテ夏冬ノ二期ニヨリテ其住所ヲ異ニシ冬季ハ本島ニアリテ潛水漁業ニ從ヒ衣類器具等ノ生活狀態亦大ニ趣ヲ異ニシ食物ハ米食ニシテ大酒ノ癖ヲ有シ昨年ハ惡性ノ混成酒ヲ用ヰタリト、患者ノ年齡ハ最少十五歲ニシテ最高五十五歲ニ達シ二十歲前後ニ最多數ナリトテ地圖及寫眞ヲ指示シ尙ホ同島ノ歷史ヨリ詳細ニ報告セラル、筈ナリシモ時間ノ都合上後回ニ讓リテ降壇セラレシハ甚ダ遺憾ナリキ。

○特發性角膜脂肪變性ニ就テ　醫學博士　高安右人氏

角膜脂肪變性ハ續發性ニ來ル事珍ラシカラズ然シ予ノ實驗例ニテハ何等豫メ疾病ナクシテ漸時角膜混濁ヲ來シ然モ鏡檢上脂肪變性ナリシヲ以テ特發性角膜脂肪變性ト名ケテ可ナラムト

患者、十五歳ノ農女ニシテ父ハ八年前神經ノ疾病ニテ斃レ母ハ健康ニシテ兄弟四人共ニ健康ナリ、

已往症、七八歳頃ヨリ時々結膜炎？ニ罹リ十歳時右眼角膜混濁シ次デ左眼ニモ同樣混濁ヲ來シ漸時增進シ流涙疼痛アリシモ二三日ニテ治スルヲ例トセリ發作ハ四日乃至三十日毎ニ來リ視力モ發作毎ニ減退セリ。

現症、体格榮養可良、局部症狀トシテハ羞明充血アリ一年前ヨリ「トラホーム」ヲ有ス眼球結膜充血シ周擁充血ヲ見ル角膜ハ兩眼共ニ混濁シ共ニ膨隆セリ混濁ハ灰白色狹長、方形ノモノニシテ集合狀ヲナシ、透明ナル部分ニヨリテ境介セラレ表面ニハ周圍ヨリ血管入リテ殆モ慢性パンヌス狀ヲ呈ス。

經過、入院時分混濁ハ增加シ左眼ハ殊ニ强シ視力右眼一米突ニ於テ（スヂルレン氏表）1/60、左眼ハ單ニ1/60ナリ。右眼角膜ノ外側ニ於テ其一片ヲ切除シ氷結「ミクロトーム」ニテ固定切片ヲ作リ染色鏡檢ノ結果脂肪變性ニシテポーマン氏膜所々欠除セルモ炎症ノ病狀ヲ認ムベキモノナカリキ（標本供覽）故ニ特發性ノ角膜脂肪變性トシテ照介スル所以ナリ、文獻トシテハ、グレエフエ氏書ニハ脂肪變性ナルモノアルモ續發性ニシテ只一例カモギー氏ノ報告ヲ發見セシノミナリキトテ患者ヲ供覽セラレ尙ホ老人弓脂肪變性ノ標本圖及寫眞ヲ供覽セラル

○限局性皮膚浮腫ノ二例　ドクトル　飯森益太郎氏

限局性皮膚浮腫ハ日本ニテモ多數ノ報告アリ其本体ハクエンキー氏ガ始メテ報告シ爲メニクエンキ氏病ト稱セリ本病ノ原因ハ種々アリテ寒冒、神經性、過勞等ナリト然シ本態ニ至リテハ今モ尙ホ不明ナリブルド氏ハ血液ノ自家中毒ナリト云フ然シ血管神經ノ障碍ニヨリ來ルナラントテ左ノ二例ヲ報告セラレタリ。

第一、十三歳ノ學童ニシテ一日山遊ビニ行キ寒冒ノ氣味アリシガ前額部ニ七—一〇cmノ腫起ヲ來シ次デ肘關節部足蹠ニ同腫ヲ發シ壓痛ナク蒼白色ヲ呈シ熱ハ三十七度三分食慾ハ不振ナリキ肘關節部ニハ紅斑アリ足蹠ハ歩行時ニ壓痛アリ次ノ日ヨリ腹痛ヲ發シ盲腸炎樣症狀ヲ呈セリハルピルグトン氏ノ言ニヨレバ內臟ニモ來ルト云フ

第二例、本年一月五日十六歳ノ男子ニ左ノ頰部下眼瞼部ニ同樣症ヲ發セルモノヲ見タリト。

○六百六號ノ實驗ニ就テ　ドクトル　飯森益太郎氏

氏ハ咽頭潰瘍及パペルヲ有セシ患者五人ニ付キ同劑ヲ注射セシニ効果アリシモ一例ハ鼻翼部ノ潰瘍益々增加シ不潔トナリ漿液ヲ出セルヲ見シト。

○腸ヂプスノ神經系症狀ニ就テ　三等軍醫正　三崎麟之助氏

日露戰役ニ於ケル該病患者貳千六百餘名ノ病症日誌ヲ檢シ其患者ヲ輕症、重症、惡性、潛延性ノ四症ニ區別シクルシュマンノ法ニヨリテ其神經症狀ヲ檢シ顏貌ハ本病ノ豫后ヲ定メ得ルモノニテ第一ニ頭重頭痛ヲ發シ頭痛ハ必發症ニテ輕症患者ニハ熱ニ比例シ不眠ハ前驅期ヨリ來ル亡少ナクシテ重聽ハ多ク存在シ意識溷濁シテ不安躁狂狀トナリ重症ノ患者ニハ躁狂狀態ノ少ナルハ其以前ニ死去スルニ基キ幻覺錯覺譫語ノ內容ニ至リテハ平時同病ニ來ルモノト全々赴ヲ異ニシ多ク被害的ニシテ當時ノ精神狀態ヲ披歷シ感情ハ一般ニ不快ニテ愉快ニアリシハ只一名ヲ見タリトテ精細ナル統計ヲ指示セラル

○糖尿病ノ診斷　醫學士　佐々木達氏

糖尿病ノ診斷ハ糖尿ノ証明ニヨリテ容易ニ診斷シ得ルト云ヘハ輕易ノ如キモ其ハ本病ノ重症時ニシテ糖ノ存在スル時モ本病ナラザル事アリテ其間大ニ研究スベキ價値ヲ認ム糖尿病診斷ノ基礎タルヤ勿論第一ニ檢査法ニシテ

第二ニ其程度トス糖尿排泄ノ程度ニ就テハ本病ニ於テモ尿中糖ノ排泄量ニ非常ナル變動アリテ殊ニ朝食前ニハ糖ノ証明不能ナル事ヲ通例トス故ニ只一回ノ尿檢ニテハ不可ニシテ一日量ニ付キテ檢査スルノ必要アリ然レドモ排泄分量少ナル場合ニテハ量ニ於テ多量ナル朝食前ノ無糖尿ヲ混ズル時ハ檢糖上%ハ勿論含有ノ糖モ稀釋セラレテ糖ノ証明セラレザル事アルヲ以テ各尿ニ就テ檢査スルヲ要ス、

糖量ノ變動ハ種々ノ關係アルモ就中食物中ノ含水炭素ニ關係スルコト大ナルハ注意スベク食後數回目ノ尿ハ多クハ無糖ナリ第二ニハ食後一時間以内ノ尿ハ多クハ無糖ナリト糖ノ排泄經過ニ付テハ食後一定時ニ排泄ヲ始メ漸次上昇シテ再ビ下降シ次食前ニハ舊ニ復スルヲ例ト然ルニ食後三時間ノモノハ多クハ絶頂ニ達ス以上ノ理ヲ以テ食後三時間以後ニシテ第一回ノ尿ヲ檢スルヲ要ス尚其排泄總分量ハ同シキモ時間ニ差アリ或ハ三時間或ハ五時間或ハ八時間ニテ同一分量ヲ排ス又同一患者ニテモ日ニヨリテ差異ヲ見ル可ク此ノ變動ハ各個人ノ生活法吸取力ノ關係ニヨリテ來ルナラム今糖尿ノ%ヲ以テ輕重ヲ定ムルハ不可能ニシテ則チ吾人ガ含水炭素ノ類化作用ヲ見ルニ第一燃燒第二グレコーゲン第三脂肪ニ消費或ハ類化スルモノニシテ尚ホ過分ナレバ第四尿中ニ殘部ヲ排泄スルモノナルヲ以テ生活狀態及ビ食物ニヨリテ異ナルハ明カナリトス故ニ一定ノ條件ノ下ニ於テ始メテ第四ノ檢尿ハ第一第二第三ノ機能ノ健疾ヲ窺ヒ得ベキモノナリ其他食物性糖尿アリテ糖尿病性糖尿ト區別スベシトテ實檢例ヲ孤線ニ表示シテ論述セラレタリ

討論　米村吉太郎氏

高安會長閉會ノ辭ヲナシ引續キ懇親會ニ移リ日中ノ理屈メキシ体ハ跡モナク失セテ一同談笑場裡ニ晩餐ヲ共ニシ散會セシハ午後九時頃ナリキ

（福田美明記）

漫録

●小原芳雄君を懐ふ

ひさしく是れ花である、爛漫として咲き芍ふも花であるが、半開の見頃ふのも亦花である、而も將に綻びんとして一夜風雨の爲に咲きも得せず地に塗みるの花に至ては實に惜むべく哀しむべきではあるまいか

小原君は誰厚誠直極めて篤行篤學の人である、その專攻の病理學に精通し造稽の深かりしは勿論であるが、餘力を以て幾多の學科以外の書籍を渉獵し、いよ〳〵其根底を強め益自己立脚の礎地を固めらるゝに力められたことは實に驚くべきものである、されど君は徒らに書籍に囚はれ營々役々として一生を研究室裡に縛せらるゝの營窟ではふかつた、同時に所謂曲學阿世的の人でもふかつた、從て日頃聞達を求め虚榮に狂ふ樣ふことは微塵もふく、謙讓自ら卑ふし至誠と奮勵を以て極めて地味に極めて眞摯に事を處し、不言之を實踐し不語自ら躬行せられたのである

一度君を訪れた者は、君が學生時代より十年一日の如く替らふかつた下宿の二階六疊に、所狹きまでに積み重ねられたる書籍の間に沒頭せしを見たであらふ、その無雜作に積み上げられたる中には、專門書あり幾多の科學書あり文學雜誌あり宗教雜誌あり醫學雜誌ありと云ふ風で、原書漢籍和本、耳目の觸るゝ處心の欲する處、手にまかせ斷えず之を繙き自得と修養に資し、聊かにても日就月將底止する所を知らざる世の進運にれくれざらんと勉められたのである、而も一度君を病理教室に訪れたものは、整然として其の一糸乱れざる底の光景に接したであらふ、一汎の醫書及專門書の書架

にあるは固より、『シャーレ』や『デツキ』の末に至るまで秩序正しく排列せられ、君が研究の一擧手一投足に勞を省き繁を避け非常に便利を與へたと思はる、又机上にはいつ見ても書籍の開かれざるはなく、本を讀むことゝ仕事をすることゝは寸時も怠らず一意專心孜々として止まおかつたのである。

君は講師として病理總論を講し、「ジエクチオン」に當り親しく指導せられたが、一度教壇に立つや辨說爽かに流暢として些の淀みなくそれからそれへと順序よく口を衝いて出つる處、諄々撓まず倦まざりしには學生一同肅然として襟を正したと云ふ事である、君は比較的年少で體格も餘り大きくなく且つ小供らしく見ゆた人であるが、學生中には反て君よりも年上で又以前より入學した人もあり、或は堂々と美髯をひねり或は妻子を携へたるもありしが、君が前に出てゝは實に鞠躬如たりで推服措かなかつたものである、うの學生時代に能くある、事に托して授業を休まんことを希ふ者あるや、君には是れ一に自已の熱心の足らざる爲自已の講義の徹底せざる爲とおし、自ら已を責め泣いて之に應對せられたのである、而して一度君の口答試驗を受けたるほどの者は君が親切にして丁寧なる且つ學ふ處の該博にして各科に精通せるに驚いたと云ふことである、これ親しく君に教を受け其薫陶に浴した人々の實話であるが、余は正に然るべしと信ずる

君の病理教室に在るや其業蹟は一に他日の大成を期せられたることゝて、研究業蹟としては今特に之を擧くる丈のことはないが、其の一汎病理學に就て博く且つ精しく攻究せられしことは云ふまでもなく、病體解剖毎に主として顯微鏡的方面の檢査に從事せられ、其の「プロトコール」に記るさるゝ處は微に入り細を極め從來未た曾て有らざる處ありと聞く、而して君には三十九年六月村上上田兩教授岡本山本兩氏と、彼の一時天下を驚倒したる越中の Rachitis 研究の爲に、一笠一鞋、論田熊無と同一山系たる能登羽咋郡管池地方へ踏査せられたことがある、當時の研究報告は「石川縣羽咋郡管池地方に於ける奇病調査報告岡本京太郎外四名」として本誌第四十二號 卅九年十月發行）に詳しく載せてあるが、執筆は岡本氏なるも統計表等るの勞苦を要する大半は君の成す處であつて、其醫界に貢獻せし勞は又沒すべからざるものと思ふ

君は久しく雜誌部委員となり筆を執り自ら元稿を纏め自ら之を校正し、繁瑣なる活版所との交渉の如き一々自ら處理案配せられた、多くの人々即ち直接雜誌編輯を取扱はざる多くの人々はヨモヤ御承知あるまいが、此雜誌を拵へると云ふことほど手數のかゝる面倒なものはあるまいと思ふ、その手數のかゝる面倒なことは親しく之に携はつたことのなき人には想像だも及ばぬものである、固より本誌に從ふ者は報酬とか賞辭とかを望んで爲すものは一人も無い、皆何れも校を思ひ會を思ひ且つは會員相互の爲に各多忙なる自已の職責以外に其寸暇を割いて勉むるのである、

四十一年六月君には本誌の爲に第一號より第五十號に至る四十二頁に及ぶ總括索引を編纂せられたが、その詳細にして周到なる、其勞と功とは本誌創刊こゝに十有五年會員たるもの一千五百に餘るも、蓋し君を推して第一とおし強ち過當ならずと信ずる、而して君が頭腦の緻密にしていかに組織的なるかは畧ほ之を證して餘りあるのである

元來君は蒲柳の質で、其第一回の喀血をせられたのは四十一年の八月で第二回は十月である、君には此の如き病軀にも係らず病をつとめて高安先生在職廿年祝賀會の報告書を書かれたのである、

全じき年十一月余は嗚呼恩師小川勝陳先生一篇を附錄として本誌第五十二號に掲げたことがある、そは同はしがきに「某日九度五分の熱をも敢てせず本誌の爲に主ら筆把らるゝ小原芳雄兄に逢ふ、曰く小川先生の爲に何か書き給はぬ？……」と記るせし如く、君の發言に基き余の執筆輯錄したものである、あまり長篇にわたれると卷頭に先生の小照を載するとにより、不時に少なからぬ費用を要することゝなり、君にはいろ〳〵苦心に苦心を

重ねられたが、遂に全責任を負ふて我等が希望を充たされた、余は常に恩師を懐ふ毎に此事を回想して誠に感謝措く能はざるものである、實に君は自己の責任を重んじ世の輕薄才子の如く之を輕んじ之を避ける樣な事は決して無く、事毎に陰に斯る美風を發揮せられたものである

君は又十全會學術實習部主任として學生指導の爲併せて小野慈善院の爲に盡くされたことは非常なものである、既に學生時代に於て慈善院が尙彦三五番丁の一隅にありたる頃より一臂を捧げて盡瘁せられた、加之同志の者と時に私費を投じて投藥施療せられた、此の如くして君には屢次咯血する樣になりても、少しく容態の輕快するや多少の熱發や疲勞を厭はず平然としていつもの如く淺野川の上流向山の一角へテク〳〵かよわれた、慈善院内彼の憐むべく賴よりなき孤獨の病人に對して衷心全情の念禁ずる能はず、或は私費を以て滋養品など給與し之を救ひ之を濟はんと專ら學生を指導しつゝ學校の爲め教室の爲め疾をつとめて出向はれたのである、その熱心にして博愛なる轉た尊敬の思に感謝の誠を濃くべきものである

當地には中等以上の教育に從事せらるゝ博物學者によりて組織せらるゝ博物學會なるものあり、君には之に關係し其の一員であつた、又小川村上兩教授によりて企てられた彼の支那語會の中絶せし後は、蓍市公會堂に於て第九師團支那語講師某氏が特に夜間開講せし語學會へも獨り入會せられた、勿論學生時代より毎年暑中休暇には東上獨逸語學習に餘念なかりしは申すまでもなく、尙石川縣金澤第二中學校醫として毎週二回出校せられ、細心能く衛生を診斷につとめられたことは、八面鋒鉾行くとして可ならざるなきの狀態であつた

君は此の如くいろ〳〵のことに努められたが、君には尙感謝すべき遺功遺蹟があるのである、君は夙に當地醫界に純學術的會合の一つだになく其の研究心の頗る乏しきを慨し、自ら卒先して醫事集談會なるものを組織し終始怠らず克く勉められた、同會の基源は去卅九年の春島田岡本氏等の結核に就て研究調査してはいかがとの意見相期せずして一致した處から起つたもので、當初は素より微々たるものに過きなかつたが、臨床(島田吉三郎)小兒結核(岡本京太郎)細菌及醫化學(八牧政孝)病理(小原芳雄)治療(中島誠)と云ふ具合にそれ〳〵受持分擔を定め、各其の範圍内に於て書籍や雜誌の講讀等を爲し、毎月一回病理教室に寄り其の結果を互に報告し合つたものである、それが漸次會員の增加し發展するに從ひ單に結核のみに止らず醫學上の問題ならばその何たるを問はざるに至り且つ金澤商業會議所に於て夜間開會する樣になつた、斯く會の擴張と發展とにつれ會長の必要を生じ衆の推す處遂に君を以て會長となし、爲に君には會計庶務通信は勿論万事自ら之を處理し些の遺憾なからしめられた事は今尙衆の記憶に新なる處である

然るに時勢の推移と外界の刺戟とは、こゝに陸軍側と開業醫と學校病院側との有志相寄り意見の交換を遂げ新に金澤醫學會なるものを起すに至つた、開業醫側よりは集談會員たる飯森岡本二氏其の折衝に當られたるを以て乃ち集談會を解散して會員全部その儘金澤醫學會の會員となつた、斯くして出來た金澤醫學會は隔月十日開催實驗又は論者等に就て各講演する趣味ある會合であるが、其の成立の動機より云へば全く醫事集談會の一轉化したものである、從て金澤醫學會の存在する限りは假令集談會の名はなくとも君が精神と君が生命とは永遠に滅せざるものと謂はねばならぬ、即ち此點に於て我等は深く君が遺功を肝銘せねばならぬのである

以上は君が病理教室在職中に於ける余が知れる範圍の一端に過きぬ、從て其全豹を盡すと云ふ如き手廣いものではもとよりない、然し若し君の一面にても傳へ君の半面にても偲ふことを得ば我願ひは足れるのである、君には殊に力めて自己の爲す處自己の行ふ處を外に顯はさるかつた人であるから隱れたる事蹟はマダ〳〵多いことだらふと信ずる、余は隱れたる逸事逸話の傳ふべくして傳ふるに由なきを嘆すると共に君が知人君が先輩君が教

を受けたる人々より之を聞き之を傳へんことを切望するのである

君は村上教授の下に在ること五星霜、初は勿論健全であつた、本誌卷頭に掲げたる小照の如き去四十年紀元節撮影のものであるが、其青春燃ゆるが如き希望を以て充たされた溢乎たる風貌と云ひ謹乎たる容姿と云ひ實に懷かしさに堪へぬのである、然るに君が万難を辭せぬ雄々しき奮鬪的過度の勉勵は竟に君をして復起つ能はざらしむるに至たらしめた

前述の如く君は餘り何事も外に顯はさぬ人であつた、病氣のことゝなど成るべく秘して語らず又人に診察を乞ふなどゝ云ふことは殆んとなかつた、從て君が父兄始め平生能く君を知つて居る人々にても其病狀に就ては餘り多くを知られなかつたと思ふ、依て今少しく君が病歷に就て記るすも亦强ち無用の業ではあるまいと信ずる

さきにも記るせし通り君の第一回喀血は四十一年の八月十二日である、五十一號附錄第六五頁に余が「去十二日夕病理教室にて篤學なる小原講師突然裂帛之響ありたるも驚き給はざりしことや」と記るせし如く、君には全夕仕事の始末を爲し將に教室を辭せんとしつゝありしさき突然喀血せられたのである、君には從容として直に細菌檢査をせられたるも「ヂストマ」卵もTb菌も見ゐなかつたのである、そこで翌朝咽喉の檢査を乞はんとて我が金城療病院へ來られ藤井氏の一診を受けられたが、藤井氏には慰安の爲め咽喉部に血管の怒張充血して一部破れたる痕ありと云ひ、つとめて其の氣を引き失望落膽せしめさらんと謀られたのである、當時の記錄によれば體溫三七、八五とあるの外何等の所見も記るされず又投藥もして無いが、其後兩三回受診せられた樣に思ふ

而してかゝる疾の或は決して顯はるゝ日無きに非ざるは勿論である、元來君には蒲柳の質とて學生時代よりその學の爲に殉死するを以て自任して居られたが、一方健康保持の必要上豫防的に結麗倆曹篤ふどひろかに用ゐられた事もある、而も君の行くとして可ならざる事なき多方面に亘れる過度の勉强は、その心神に十分の餘裕ありしに係らず一秒を惜み一分を爭ふ身體的餘裕のなかりし爲め遂に其健康を失するに至つたのである、思ふに本誌總索引を編成せられたる如き或は喀血を見るに至つた誘因の一であつたらふと思ふ

忘れもせぬ全年四月余が金澤病院婦人科の爲め十全會の爲め聊か後來に資せんとの考あり、即ち科の爲には過去の事蹟の湮滅せざる樣「我科の歷史」を書き、會の爲には從來雜誌部には委員とか編輯員とか直接の關係はなかりしも屢禿筆を弄した緣より一つ目錄にても編んで見ようかと思ひ君に話したことがある、然るに君には既に前以て其意ありしと見ゐ索引を作るべく目下考案中だと申されたから、夫では君に於てヤツテクレ給へと云ひ、僕も一度蹉跌してより餘り健ふらざりし身のそれ切り我科の歷史さへも書かずに今の病院へ轉ずるに至つたのである、かくて其の出來上りたる索引を見るに驚くべし頗る精細にして完備せる何人の力をも借らず獨力にて成し遂げられたる、而して此索引の成る頃より君の健康は害せられた樣に思ふ、而も君の一向介意する處なき暑中休暇にゐるも孜々として教室に出入し日夕研究の歩武を進められたのである

次て九月新學年に入ると共に又講義を爲し、外見上人目には格別の異常も覺ゐざりしが、矢張時ならぬ輕熱が時々あつたのである、今は日も忘れ果てたが十月の某日、第二回の喀血をせられた、その際は前に比して少量なりしも君には人に秘して語らず私かに服藥をせられたので、余が「某日九度五分の熱を敢てして尙本誌の爲に筆を執られ」たと書いたのは丁度此際である、亦高安先生の二十年祝賀會の報告書のおくれたのも此時である、されど君には猶且つ教室の人たり教壇の人たりで依然として自已の職務に服して居られたのは只々驚くの外はなかつた

君には此の如く病軀と戰ひながら偏に勉められたが、四十三年二月岡本氏に贈られたる手紙（第九信參照）にある如く、其歲も暮れ明くる四十二年の

紀元節第三回の咯血をせられたのである、校則改正の結果丁度同月初より後學期試驗あり、自ら多數の學生を相手に終日口答試驗を續行せられしがそも〳〵之を誘發したのである、熱は八度内外を昇降し九度以上に昇ることは稀なりしも、咯血の多量にして長く續きしことは約二週間にも及び、ろの間仰臥安靜、談話の嚴禁はもとより、少しの動搖にても直ぐ血液を見るものから、此際より診療にいそしまれたる岡本氏は勿論、時として同宿の足立諒君の麥角注射を受け、或時は止むなく自ら注射を試み其止血をはかられたのである、然るに幸にも日を閲みし月を經るに從ひ漸次佳良の經過を取り、櫻花咲き初めし頃には人の肩に凭りつゝ低歩躊躇し得るにいたり、日に增し力つき元氣加はるにつれ海濱美川にも遊び、遂に長途の瀛乘にも差支ゐなしと覺ゆるに及び、當地をあとに東上せらるゝに至つたのである、當時紀念の爲めにとて一夜訪問の上三宅花圃女史の「花の趣味」を贈られたが、之が余が君に會ひし最後にして又永久の紀念物となつたのである、余は直に表紙の見返へしに「病友小原芳雄兄は信州之人にして篤學謹直夙に衆に推重せらる、不日東上すとの事、すゐはち今晋來訪の序、病中聊か好意を表せし紀念として本書を贈らる、厚誼誠に深謝すべし、明治四十二巳酉年六月中澣五夜識」と書きとめしが、次でその出發を聞くに及び更に「小原氏一昨二十三日朝上り二番列車にて東上せられたり巳酉年水無月廿五日」と記るした、

東上の途中福井敦賀名古屋等下車の上、名所を尋ね故蹟を訪ひその心神を縱にせられたが、東上後も亦心身を養ふに專らつとめられ、健康の益恢復するにつれ七月より東京醫科大學病理教室に入り山極博士指導の下に研鑽に從事し、全年八月には山梨縣下へ日本住血吸虫病調査の爲に進んで自費を以て出張し、日夕顯微鏡と診療に忙殺されつゝ酷暑炎熱の苦と戰はれた、當時出張の報を得た我等は實に人知れず遙に君が身に多大の憂慮を馳せたのであるが、幸にも何事もなく歸京せられたのは大に喜ばしく思ふ處であつた（君が通信參照!!!）

その後君が健康は益恢復して素人眼には全くの健人と映したと見は、父兄より開業と結婚との二問題が提出せられたものと察せらるゝ、即ち翌四十三年二月岡本氏に宛てられたる手紙によるも、如何に君が此問題の爲に苦心し焦慮し且つ其眞情を吐露して相計られたか分るのである、岡本氏の談によれば、全氏には多大の全情を以てその結婚をすゝめられたとのことにて、君も亦醫學者としての立場より大に苦心慘憺せられたるものゝ、周圍の事情上涙を呑んで父兄の意に從ふべく決心せられたものと推せらる、余は自己の經驗上また此二問題の爲にいかに苦慮煩悶したかを思ひ、一は幸に故愚師先生の溫き全情によりて解決したるものゝ、他の一は今尙一族の者より時々迫らるゝの煩に堪ねぬことを聯想して、層一層君が身の上に衷心全情の涙を灑き袖を絞るのである

此の如く君は二問題の爲に苦しみゐながらも、餘儀なく父兄の意に從ひ結婚もし大學出勤の傍ら開業もせられた、されど此二問題解決の前後より當地知人へは殆んど全く音信不通となつた、今にして之を思へば一は多忙なると一は程なく又健康を失せられし爲に心ゐらずも失禮せられたものと思はるゝ、昨春來岡本氏に會ふ毎にいつも君の話が出て、ドーシテ居るのであらふ、或は又無理をして健康を害したのではあるまいかゐと噂し、殊に昨夏島田吉三郎氏が新潟醫學專門學校赴任の途君を大學に訪ひしに、既に一月斗も前より出勤せられずとのことに空しく歸られたりと聞くに及び、一層不思議に堪ねざりしがツイ今年の正月も亦此噂が繰返されたのである、然るに驚くべし意外にも正月十三日の夕方令兄眞一郎氏より死亡との案内あり、丁度全夜新年會あり、自ら案内狀を懷にして行き、席上ろの話の出づるに及び岡本氏亦案内を受けたりと云ひ、藤井米村山田生駒田中氏等と共に一同惜愴の涙にくれたのである、そこで何か君の爲に紀念品を遺さんと云ふあり追悼會を營まんと云ふあり、甲案乙議、散會の途上尙いろ〳〵

の說が出た然し取敢へず印刷中の本誌に吊辭を揭げ且つ紀念品計畫の企あることを豫報すべく決した

而して君が大學出勤後の模樣は、今回余が問合せに對して長與助教授より回答せられたる左の一文によりて略ほ察せらるゝが、君にはその餘暇を以て著述に從事せられ Schönheit des Weibes の譯纂を試みられ某師の名によりて刊行せんと企てつゝあつたのである、又雜誌科學世界にも關係して親しく筆を執られた、

拜復、（省略）、扨御問合せの件、一、教室に來られしは四十二年七月頃にて、教室に欠勤勝とおられしは四十三年四月以降に御座候　一、教室在勤中は非常の勉强にて同室者（約十二三名）も感服致居候樣子に御座候、研究事項としては四十二年八月福士學士（當時の助手）と共に山梨縣下へ出張日本住血吸虫病の實驗的研究をせられたること有之候、其成蹟は兩氏共未發表せず隨て不明に御座候、小生の知り居る範圍にては格別の新發見ふく發表する丈の材料なかりしと存候、其外金澤にて實見せる骨軟化症の標本に就て更に檢鏡致居られ候　一、教室在學中は溫厚篤實にて非常の勉强家たるを失はず、暇ある毎に書見に餘念ふかりしものゝ如く、健康狀態も當初は格別の事ふかりしも咳嗽は不絕有之候由、併し在學中格別病勢增惡の樣子も見受けざりし由に御座候

右要用のみ申上候　草々　二月九日　長與又郎

又君が開業後死に至るの模樣は、令兄より回答せられたる左の親書が最も能く之を顯はして居る、その令弟に對する友情の濃かにして感慨措く能はざるものあり、狀況のいと詳しくして目前に親しく之を見る心知せらるゝ誰か一讀泣かざるものあらんやである、余は會員諸子が肅然として一再ふらず默誦せらるゝことを信して疑はぬのである

＊　＊　＊　＊　＊

拜啓　愚弟芳雄死去に付御丁寧ふる御悔狀に接し難有靈前に拜誦仕候生前は一方ならぬ御愛顧を蒙り尙靈を慰する爲色々の御催し被成下その御申越何とも難有家族一同奉深謝候小生後述の次第にて不在ふりしに依り葬儀後御通知申上げ何とも失禮の段御詫申上候去る廿六日は三七の拂に相當り候間法會致し小生アト始末の爲廿八日上京仕候遺物を整理候處御兩人樣の御芳墨多々有之如何に亡弟が學生時代より終世御愛顧を蒙り居候へしが實に感謝の言葉も無之候

亡弟は昨年四月大學出勤の餘暇開業してパンを得る一助となさんと巢鴨へ開業致し候是と同時に不便旁々從妹を妻に娶り候（妻は長野高等女學校出身）開業當時は業務の忙しきにつれ大學へ出勤せず六月に至りて微恙の爲業務の傍ら靜養致居候八月中旬より健康益々勝れず終に就褥致候家族の心配一通りふらず名醫よりの受診を進むるも肯せず只自已の處方にて服藥療養仕居り幸ひ十月下旬には餘程快方と相成申候されど此間少しも筆等を拓らず爲に何れへも御無沙汰仕候兄弟も嘗ふらざる皆樣方へも失禮致し何とも申譯無之候併し病氣故と思召し不惡御海容被下度願上候十二月初旬亦復容態惡しく相成候旨通知有之候間小生他の所用を兼れ上京致し色々相談の結果東京の地も中々寒き故醫院を讓渡し一先つ故郷へ歸り正月にても終へて何れへか轉地療養ふす事に決定し同人妻及大槻文雄（從弟の高等農學校生徒）の三人にて十二月十九日故郷へ歸り申候小生は跡整理の爲滯京致し居り候長途の疲勞と遽に寒き所へ來りしにて咽喉を痛め且つ非常に衰弱を益し候ゆへ家人親族の受診を勸むるも聞かず去れど容躰益々惡敷相成候間達ての家人の勸を容れ十二月廿七日上諏訪町（六里を隔つ）に開業ふし居る吾々の義兄弟に當る（姉の良人の弟）醫學士有賀峰次郎氏（金澤高等學校出身にて亡弟の金澤醫專校へ入學當時同宿なし居り監督萬端ふし吳れし人）の診察を受け申候聞く其際は互に獨逸語にて談話を交換し小生

は本年一杯に片附くや否や家人に病氣の事は談し吳れるなどと云ひし由歸鄕當時より本人は既に……を期し居りしにやされど家人の心配を慮りて少しも死の近づきしを語らず居候正月に入りて皆樣より頂戴せし年賀狀東京より廻送相成候ものを看護者に讀ませ只々嗚淚に咽び居り一言も發せず此時の心情や如何ありしと傍らのものも袖を絞り申候六日の日は朝より容子の變りし爲如何ありやと尋ぬれば變りなしと云ふ普通の病人と異り漫りに醫師を賴むと云ふ譯に參らず心配なし居りしに午後二時俄に容子一變す（當地は片田舍の處とて附近に醫師さへなく一里を隔つ）醫師へ急使を走らせ候も間に合はず眠るが如く死去仕候臨終の際母上に向ひアノナヘアノナヘを繰返したるのみにて（八田曰くアノナヘとは信州にても伊那地方に云ふ詞にして東京語のアノ子なりと聞く）少しも苦痛を感ぜざる容子に有之し由、東京に居る小生へ午後三時半「ヨシチキドクスグカヘレ」、「シスイツカヘルヘン」との電報二通同時に着仕候小生の驚愕唯茫然、取敢へず「アスカヘルソウギノヨウイシロ」との電報を發し候、嗚呼止んぬるかな嗚呼止んぬるかな生者必滅は世の習にて死ずるも證なき事ながら彼が餘り大なるにもせよ希望に向いて進みつゝありしに中途にして斃れし事の如何に殘念なりしか如何に無念なりしかと其れが氣の毒と愚痴居り申候、種々整理なし翌七日十一時東京を發し歸途に就き候瀛車中に於ける小生の感慨交々相往來し耻しなから涙に暮れ申候實は去る卅九年十一月愛弟重德中學五年生にて東京にて赤痢病に罹り大學病院に治療（小生始終附添居り芳雄も金澤より態々見舞に來れり）致し候も藥石効なく終に死去日暮里火葬場に茶毘一片の煙と消え遺骨を持ち歸り今又片附に來りし小生が東京に居り故鄕に愛弟を失ひ打電に接し歸鄕するとは不遇不幸小生の如き者は世にあらざるべく故鄕に在る老父母の心中亦如何ありやと其のみ氣に懸り申候小生方申上ぐるも口廣き事なから二弟とも小學校時代より常に首席にあり世人同僚より秀才と呼ばれ羨望せられし身が病氣さへ云へ早世するとは前世如何なる罪を造りしか我が家は惡魔に呪詛はれたるには非ずやなど悲嘆の涙に瀛車中を過ごし申候夜十時半家着死したる事の知らせありしより斯くあるべしとは期しつゝも今目のあたり白衣もて蔽はれたるむくろを見ては一層の感を增し彼が眼鏡の下に眠れる眼、堅く閉ちたる口の開かずやと恨み申候人生悲哀の極小生の淺學なる形容する文字を知らず宜敷御推察願上候斯くてあるべきにあらざれば泣く〳〵柩に納め翌八日午後二時親族知己朋友の見送りを受け葬儀相營み申候法號は　旭光齋智德芳雄居士　に候會葬者皆前途有爲の當地の花を失ひしを惜しみ悲しみ一座寂として聲なく涙を浮べ僧侶の聲さへ泣聲に聞へ申候此日曇天も亦憐むに似申候南無阿彌陀佛……

御申越の寫眞最近撮影のもの更に無之候貴地皆樣方の內へ差上申候ものにても有之候はゞ御用ひ被下度候生徒よりのもの四葉兎に角御送り申上候四十二年五月廿八日病後の撮影はあまり瘠せ居りいかゞやと家人は其複寫又は引延ばしを氣遣ひ居り候御參考までに差上申候次第につき宜敷御取斗ひ被下度候日誌又は感想文等は昨年四月より更に無之候間左樣御承知願上候病氣に就ての狀態も前途の如く有賀氏唯一回の診察丈にて詳しき事は不明の由なれど其時の容態は仝氏より直接貴下へ申上ぐる事に候間御了承願上候

葬儀の際の吊詞並に長野縣下の四新聞及東京新聞の二種へ掲載され候もの必要に御座候はゞ御送り可申上候岡本樣より御惠送に預り候北國新聞難有拜讀靈前に供し申候

序に亡弟所藏の內の病人の寫眞二十六葉（八田曰く侚僕病調査の爲出張せられしときの寫眞なり）同じく御送附申上候間學校なり病院なり へ御寄贈方願上候

書籍も澤山有之候得共小生等門外漢には書名すら不明と云ふ次第にて處置に困み居り候

乍末筆皆々様へ可然御鳳聲の程願上候早速故郷より御通知申上ぐべきの處俗事に取紛ぎれ居り延引の段申譯無之候不悪御海容願上候　敬具

四十四年二月一日　東京にて　小原眞一郎

岡本様　八田様

次伸　右書き終り候處へ八田様よりの御芳墨と十全會雜誌故郷より廻送拜讀仕り候故人の爲記念物を遺すべく皆様御配慮の上着々御進捗被下候との事恐縮の至りに堪ゑず候小生よりの御通知延引致候段慙愧至極にて申譯の言葉も無御座候何卒御宥恕願上候　頓首

尚御尋れの亡弟妻懐胎の義十一月初旬變徴あり專門家橋爪先生の診察を受け治療致居候處同月廿八日流産致候重れ〳〵の不幸御推察願上候亡弟も是が爲に非常に心勞もし落膽もふし候様子にて或は此等が死を早めし一因かとこぼし申候

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

さはれ天もし前途多望ふる君に假すに尚十年の歳月を以てするあらば、君には確に學界を衝動し世人を啓發する幾多の研究業蹟を發表せられたに相違ふい、君には日頃病理學專攻には是非理化學の素養ふかるべからずとし、彼の博物學會に關係せし如き正に之が爲である、その東上に際しても之よりゆる〳〵理化學を修め且つ病理學に一生を委れん覺悟なりと申されたが、其刮目して俟づべき時機到來は愚か、ろろ〳〵研究の緒に就くべき第一歩に於て敢なくも易簀の不幸を見たのは、君かやるせなき心中のほど洵に想察するに餘りあるのである

げに君は三十四年醫專校とふりたる我校の花であつた、その花たる朝日に

に荷ふ櫻花ではふくて咲きも得せず宵の嵐に散り失せた當であつた、せめて半開の見頃にも達しふば斯くも惜かるまじきに、嗚呼々々我等の惜しむ處こゝにあり我等の悲しむ處全くこゝに在るのである、……あはれ〳〵芳雄之君!!!　噫あはれ小原兄!!!

四十四年紀元節の夜半君か靈を偲ひつ、　八田智証識す

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

人の眞情を吐露し其實況を窺ふには日常復せし消息に如くものはあるまいと思ふ、余は今君が眞情を偲ひその實況を窺ふべく漸く蒐め得たる君か病後の消息を掲けて前文を補遺し且つ參照に資せんと思ふ、此等の消息や終に君か遺翰とふつたのはかへす〳〵も殘念である

一　（臺灣總督官邸繪ハカキ八田氏宛）

御近況伺上候、御配慮を煩はし候私の病氣も御蔭様にて日に〳〵佳良に赴き候まゝ他事ふから御放念被成下度候

過日病初より堆積の書信等を披讀候處御惠與に預り候小川教授との御寫眞及び貴翰拜誦、同病相憐との條いつもふからの御厚情に感泣仕り候、當時綱島氏が寸光錄を散讀致居り氏が心裡を懷ふの念動き居り候際にて胸奥に潛める血塊の活躍を禁じ得ざりしわけにて候　不一

四十一年三月廿日　大手町病褥にて　芳雄

二　（福井橋本左内の墓繪ハカキ仝上宛）

私儀昨朝突然出發、漂浪生活の第一歩を蹊み出し候、御暇乞にも參堂仕らず欠禮致し候、多年の御厚誼を拜謝し今後も相變らず御交際の程願上候、昨日福井に下車、殆んど六時間の長き足羽山の眺望藤島神社左内墓（實にみすぼらしきものこゝに橋本家代々の墓、菩提寺あり）、城跡を見物、五時更に南下七時すぎ敦賀に下車仕り候、こゝのことは後便より、貴院諸君によろしく願上候、爾天、

四十二年六月二十四日夕　名古屋に於て

三　（敦賀松原神社の繪ハカキ仝上宛）

今朝敦賀名所の大暑を見物、金崎宮氣比神社松原公園耕雲齋墓等にて候（此松原神社は武田伊賀守等を祀れる所にして明治十一年　今上陛下の北陸行幸のみぎり賜はりたるおりと、社の後方に一行の墓あり可おり大おるゝ塚をおせり）、十時半上り列車に投じ米原より東轉四時名古屋に下車仕り候米原より雨天、見物もかゝわず困り居り候

四十二年六月廿四日　よし生

四　（沼津靜浦の富士御用邸海濱の眺望繪ハカキ仝上宛）

昨日午後俥にて泥道一里、瀛船によりて海上一時間半、漸く田原に到着、一夜を渡氏と快談に過し申し候、仝地方にての仝氏の好評籍甚、……

四十二年六月廿六日午后　沼津驛にて

五　（富士十勝、御殿場附近ノ富士、岡本氏宛）

炎暑の節高堂益御清適の段奉遙賀候御官照御惠與に預り忝く拜見仕り候余りに好くうつりすぎて別人の感有之候、金澤の斯界は如何に候や何處も同じ暑さ哉にて例の如くにて候や、來月初旬には金澤醫學會例會有之候事と存じ候へば幾分の刺戟も享受致さるべく候、學校病院の近況如何に候や、東都の醫學界も暑中休暇中に候、學會も開かれず候、然し脚氣研究は旺盛の樣子に候

昨夜は日比谷公園にて海軍々樂隊の奏樂をきゝ候、斯樣な遊ふ事の方が圓形細胞の滲潤よりも面白く候、呑氣者にも困り候

私儀別狀無之候間御放念被下度候八月一日より山梨縣へ旅行の豫定に候、避暑旁々と申す譯に候得共甲府は本年の全國最極暑の地に候、仝行者は大學より出張を命ぜられ候助手福士學士に有之、例のシストゾミアージス調査に候

小生の Photo は五月下旬撮影のもの有之候得共余り病人らしくゐり候まゝ（病人には相違おけれど）遂に放棄致し候、何れ撮影の上御送り申すべく候

四十二年七月二十五日　東京にて

六　（富士八合目郵便電信局の繪ハカキ八田氏宛）

酷暑の砌御機嫌如何に候や御伺申上候、小生御地離別の時、上京後、いつも諸賢の尊慮を煩し候段恐縮の至りに候、過日の貴諭拜讀今更に感銘仕り候、着京後幸に健全些の異常無之、七月初旬より病理教室に通ひ居り候、尤も遊び旁々にて之と申す研究も致さず金澤にての材料の跡始末おど致し東京の研究ぶりを傍觀致し候、八月二日病理助手同行日本住血吸虫病研究の爲め此地に出張、今月末迄滯在の豫定に候、日々愚者の診療（地方民の希望により）と主に進入門戸、虫の發育經路に向ひ調査致し居り、目下は水捿軟体動物、魚類等に就き檢査を施し居り候、藤井山田其他の諸君へよろしく御鶴聲願上候

四十二年八月十六日　山梨縣西山梨郡甲運村役場内

七　（信州諏訪岡谷製糸場の繪ハカキ岡本氏宛）

朝夕は餘程涼しくおりました、愈御清適御研學の御事と遙賀し申します、御地方は來月の行啓準備のため諸事多端のことゝ思ふ、木村先生來澤致されし由、北陸醫界は先生か年々の來遊にて多大の刺戟を享受せずや、生義益壯健、頗る呑氣者となりました、地方病調査も一まづ大體に於て完了とした、勿論不可解と云ふことにですよ、水捿動物中、河具子に一種の Cercaria—Radia—Sporocyst を發見し、既に三週間の長き、かれこれとひねくりしも、地方病のXにすること疑はしく、何れ歸京後、圖書館通ひにてもして數閲月の研究と、今後時々當地方へ出張して續行したる上、何にとか斷定し得るだろふ！？！、〇〇〇〇〇〇甚た素養乏しく萬事面倒を見てやる始末、之につき可笑しきは、小生の河具子内 Cercaria をサモ眞らしく發表して地方愚人をまどわし、河具子に對し危險物視せしめて居

る、丁度富山縣奇病一件がジヤガ竿云云との風聲鶴淚のやうふと噴飯し、且つは學問界兼社會に對する德義として憂慮して居ます。月末には歸京致すべく、一ヶ月の滯在、馬鹿の程度をすゝめたから一日も早く活躍たる都ぶりの泥中に入らばやと思ふ、

金澤を戀しく思ふ念は常に胸中に蟠つて居る、兼六の花か尾山の城か、非ず、惰深き異性か、否、學校か、ラボラトリユムか、知遇を得たる師友か、然り……、時折りは數日を北陸の都に遊ばうと思ふ、生命あらば來春！！！

四十二年八月廿八日早朝　　甲州にて

八

（足立諒氏宛）

秋空いよ〳〵澄みわたり菊や紅葉の尋ねどきとなりました、大兄益御機嫌にいらせられます由、何に方の結構と存じ上げます、御別れ申しましてからいつも御無沙汰いたしまして相濟みませぬ、貴院の皆樣へも御伺ひ申さればと思ひつゝ失禮ばかりして居ます、外科部に異動はありませぬか、藤井樣御健勝にや、飯森ドクトル君今夏病院組織に改められし由、近江町にも松田亞米利加ドクトルとか開業とのこと金澤も今では中々開けて來ましたかれ、大手町の繁昌如何矢張後家町にや、

十年住み馴れた土地にモ一愛想をつかされきつて出發した放浪生も常に御地のことを思ひ出します、まるで眠れる猫のやうな靜かなヤーヤ人の内におとなしく暮した昔の味は忘れられません、放浪の生涯も時には愉快もありますが深くもちついて考へ出すと馬鹿らしくてしかたがないです、けれど遊んであるくには東京ですれ、日比谷の草園は名も知らぬ紫紅濃淡の草花でかざつて居る、三越や白木屋は素通りなるも上野の大ガラン淺草の雜鬧、四時遊子の足をとゞめるものばかり、意地張りの江戸的美人をさがすも面白く電車内の美人觀またわるからず、こんなことに勢を得てその日〳〵は無意味に動いて居ります、ね隆樣に身体に異常を自覺致さず餘程肥えました、やつぱり遊ぶに限るれ、大兄も餘りに氣をつかひ餘ふる、向山や野田山への山遊に活力を添え給へ

さよなら、またのときに

四十二年十月十六日中食の小閑に書く

東京帝國大學病理教室にて　　芳雄

九

（岡本氏宛）

永らく御無沙汰申しました、益御多祥、御研學の段大慶々々、Eiweiss か Fett の御研究ですか、色々の Chemische Apparat の御買入は、醫化學教室の殆んど一手の御用きゝある宮川器械店（醫科大學各教室、藥局、理工科大學等研究所へ出入する、一後藤風雲堂は金澤醫學專門校ゐどはよく注文して居りましたが東京では評判よくありませぬ、Kostbar だからでしやう）が丁度當教室にも出入致して居りますから、其に見積書を出させました、それは同封のものです、此家は品物が確實で勉强するとの評判があります、モ一一軒の當教室へ出入のものへ云ひ付けましたが、まだ持つて來ませぬ、この方は平生高價ゆへ先づ多分だめでしやう、此見積書通りで御差支之れゐくば、小生へ仰附け下さるとも、または直接に御申附ゐさるとも、運送は鐵道便よりも通運會社の方 billig 此店よりは小生も常に Farbstoffeapparate なども買ふて居りますから私からとして注文してもよろしくございます

過日來御地方は暴風雪打續きましたそーですが、思ひ出してもゾツとするのは北國の冬ですよ、下駄ばきの洋服先生がいかにもユー〳〵と歩くさまは全く別世界觀です、金澤醫界が潛究にこつて居らるゝとはねめでとー、何れは驚天動地の Ergebnisse が發表されるでしやう、此十日には例の醫學會がある筈と思ふが Intressant のことが出そーですが（會報、昨年分のはまだですか）、金澤にも Prof. Sasaki, u. Matsubara の両先生が盛んに御研鑽の Reizung を附與せられつゝあることゝ思ひますが、佐々木先生の御健康御近況如何、下平 Prof. はいつ頃お歸りですか、新たゐ Reiz. が

加へらるゝことでしやうか、次の洋行はとゐたとの風評か、諸方へ御無沙汰いたして居りまして、手紙をあげるも誠にきまりがわるいよーです、れ序の節皆樣へよろしく願ひます、村上先生御健在の由、先生の御心うちをお察し申せば誠に涙が出ます、病理教室の出入、病理書をひもとけるとき、朝か夕かに先生を思ひ出しては泣いて居ります、御蔭樣で至極健康 Scheinbar には ganz Gesund. 私が Phthisiker だなんて誰も信を措きませぬ、此頃は尙更肥滿しました、金澤在住時の約三倍位攝食し体重も從て增加しました、もう一周忌です、丁度此頃は鮮血を咯ひて百三十の學生に朝から晩までつめて Mundlich の Examen をして居つた時分、十日夜からの Haemoptoe. 十一日の祝賀式には是非最後の母校にての式にとつとめて起褥、而も Profuse Blutung 其夜の曉方認めて學兄に御診療をお願ひ申した、アヽ、もう rundlich ein Jahr!!. 一周年はまるで死んで居りました、東京にても、病理室にても、いつも引込み主義、讓歩主義で隱れて居りました、が、これから生れかわらうと思ひます、墓日本的、金澤的、殊に○○の主義にならされた自分には頗る東京主義吹き主義を嫌つて居りましたが、今度は漸次この流義に調和を得て行かうと思ふ、然し敢てラッピーレンすると申すわけにこれおき故乞御安心、昨秋より私には二ツの問題が起つて煩悶して居りました、開業問題と○○事件、爲めに此冬歸省、前者は八分通りは切りぬけましたが、後はどーもだめらしい、こんな Invalide. 而も Schwerlich な Phthisiker でありおから、もう胴体まで Sarg の内に入つて居る自分が heiraten するなんで社會がゆるさないことですか、Heimat ではとてもきかぬ、しかも相手は相等の教育あるものですから猶更こんなことでは承知しない、幼少時からの Braut であるものから Gesund のこと位ではだめです、依て私は遠國へでも逃げようか金澤へでも行かうかと考へ中です（其女は東京で高等女子專門教育を受けつゝあるのだから）、何かうまい工夫はござりませぬか、御高敎を仰く所以、大ぶつまらぬことを書きました、昨秋から私の住所をお知らせ申さゐんだのは、あちこちと轉居やら、知人の家に厄介にゐつたりして僅か半ケ月間に三四ケ所かわつて居りましたからです、一月上京してまた表記へかわりました、餘は後便にて、

四十三年二月四日　　本郷區湯島新花町三五、前田方

（仝上宛ハカキ）

六日出の御書面昨夜拜讀、本日夕方新橋へ用事有之候序に店へ立寄り最初の五品丈は過日の寸法通りのもの明日荷造、鐵道便にて御送荷致すべき樣命し置き候、スペクトロスコープは其レンズは顯微鏡のオクラール代用し得る故何れの處にてもレンズ不附品買求むる由、夜にて仝器械を見ること能はず候が、明日學校まで持ち來る約束致し置候間一覽の上御返事申すべく候

去五日東京醫學會例會あり Paratyphusbacillen と Mäusetyphus との區別に就て西野氏、惡性貧血の病理補遺土屋氏の演舌あり、前は両者両一如何は目下未定の問題にて同一說勢力あるが仝氏の檢査上 Absorptionsverfahren にて確實の差異ありと云ふ、後者は A. Schmidt 氏教室にての研究にて仝症の Kryptogenetisch とせられしものは Darmtraktus の chronische entzundliche Infiltration 存在し之により Darmtraktus の Wand に entstehen したる Liporde Substanz が vielmehr に resorbieren され一方には Knochenmark が Kompensation あるにより此 Lipoidsubstanz が Hämolyse を起したるを Kompensiren し能はざるにより起るものゐるべしと、

Schistosamiasis の研究昨日大体結了、本日より山極博士の Arbeit の Hälfte を致すことゝなり beim Beriberi の Blutgefäss が先年多年の所說の如く Kontraktion を起すことを Histologisch に nachweisen することゐり前年來當教室にて緒方學士調査中、小生のは Maus の Gefäss との比較ゐ

り來四月學會には緒方氏より報告あるべし、是迄には博士の所論に反すとか、

於獨國 Doktor Exame が頗る都合惡しくおりし模樣、Dr 買が毒を求めしに因するか　昨夜雪、本日晴天、四十三年二月九日夜九時

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

因云、小原君に就ては令兄眞一郎氏、親友高伊三郎氏中島誠氏、その他數氏より新事實の報知及感想等御寄送に預り、是非その厚情に酬ゆべく本號に投載の筈ふりしも、頁數の都合上また如何とも爲し難く、凡て次號に讓り申候間、何卒不悪御含み被下度奉願候、尙同君の隱れたる逸事逸話等は、ぞく〳〵小生宛（金澤市彦三八番丁金城療病院内）御一報被成下度、君が先輩君が知友君が教を受けたる方々に深く奉懇願候

八田智証

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

抄錄

●六〇六號ノ新溶解法

一、ワホート氏ハ六〇六號ノ粉末（一、〇）ヲ1/2立方迷ノ純「メチル、アルコール」ニ濕シ之レヲ磨碎シ用量ニ從テ四—六仙迷ノ食鹽浴液ヲ加フ注射ハ肢關節部ヨリ上方ニテ臀筋内ニ行フモノニシテ注射自已ニハ毫モ疼痛ヲ伴フコトナキヲ以テ談笑ノ間ニ之レ遂行シ得ベシ若シ夫レ本劑ノ不溶解性方法ニ於ケル際ニ見ル如キ化膿又ハ膿脹ニ至リテハ之レヲ來サズ加モ其作用ハ迅速ニシテ著大ナルガ如シト云ヘリ

（Münch. med. Wochenschr. No. 42. 1910）

二、ハーリツテル氏ハ本劑ヲ〇、三ノ「メチール、アルコール」ト濕シ之ニ一〇立方仙迷ノ溫キ蒸餾水ヲ加ヘ更ニ「ナトロン」溶液ヲ加ヘ最後ニ醋酸ヲ加ヘテ中和スルナリ之レヲ左右ノ肩胛間ニ於テ皮下ニ注入ス此法ハ患者ニ便利ニシテ且疼痛少ク有害ナル後作用ナシ治療ノ結果ハ甚ダ佳良ニシテ且神速ナリ再發ハ未ダ曾テ遭遇セズ

（Münch. med. Wochenschr. No. 43. 1910）

以上二件東京醫事新誌抄

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

海外雜報

●エールリツヒ氏の叙勳

新驅梅藥發見者エールリツヒ氏は獨逸皇帝より、ル、アンネン勳章を授けられたり、と傳へらるゝが、秦佐八郎氏の談によれば、ル、アンネン勳章は佛國の勳章ふるが如く右は多分何かの間違ふるべし、寧ろ近々エキセレンツを授けらるべしとの方眞實ふるべし。因にエ氏の住居せしサンドラール町は此程バウル、エールリツヒ町と

改稱せる由。

レントゲン教授の叙勳　彼の一八九九年X光線を創意し。大に學會に禎益したる、ギーセン大學特別教授たる氏は、此程獨逸皇帝陛下より特に學術上の功勞に對し、プール、ル、メリート勳章を授與せられたりき、氏は一八四五年三月レーンプルヒに生れ、後ちチーリッヒ大學及ウュルツブルヒ幷に、ストラスブルヒの各大學に學び、一八七六年ストラスブルヒ大學の正教授に任ぜられ、一八七九年。ギーセン大學の物理學特別教授に任ぜられたる人なり。

コッホ紀念牌　獨逸國ウオルスタインと云ふはローベルトコッホが開業醫として働きつゝありし小市なり今回市會に於て議決の上コッホが初めて脾脱疽に關する論文を起草したる建物の入口にコッホ紀念牌 Gedenktafel für Robert Koch を掛くるに至れりと云ふ

ノートナアゲル　故維納大學內科教授ノートナアゲルの爲に去る十月二十九日銅像除幕式あり。

フランツ、キョーニヒ　伯林外科學の教授たりしキョーニヒは昨年十二月十三日歿す享年七十八歳。氏は蠟科大學卒業後一旦開業醫師となりて診療の傍ら主ら學術研究に從事して遂にロストツク大學の外科教授に就任するに至れるを以て尤も異數なる拔擢を蒙りたる人として異彩を放てるなり。氏の外科學上に於ける效績は我邦にても知らざる外科醫なし。

クレエンライン　先頃死去したる瑞西チュリヒ大學外科教授たりしクレエンラインは其遺產の內より金拾貳萬圓を小兒科設立費に、金貳萬圓を大學教授恩給費に、又其所有圖書全部に金四千圓を添にて大學外科教室に寄附したり。

キュリイ夫人　亡夫と共に「ラヂウム」を發見したる夫人は今回佛國學士會院會員の候補者に推選せられたり、然れども古來より學士會院會員に婦人の當選したることなきを以て遺に佛國の學者社會にても議論紛々として果して此名譽ある一橋子をキュリイ夫人に許容するや否やは疑はしと云ふ。

獨逸諸大學の學生數　昨年冬學期に於ける醫科大學生はゲッチンゲン二百十七人(內女子十人)。ハルレ三百四十七人。キール三百五十一人。ライプチヒ七百五十八人。ギーセン三百五十七人(內女子十七人)。ハイデルベルグ五百八十三人。エルランゲン二百九十一人。フライブルグ七百六十八人。グライフスワルド二百四十三人。

女醫　獨逸國に於ては年々增加の傾きあり即ち千九百〇八年五十五人、翌年六十九人、而して本年(千九百十年)は百〇二人に達す、又女醫學生は千九百〇九年乃至同十年の冬學期には三百七十一人ありしも千九百十年夏學期には五百十二人あり但し此內に外國女醫學生も合算せらる。

專門家　千九百〇六年には獨逸全國にて六千二百五十九人(二〇、四%)、ありしが昨年は七千二百七十二人(二二、四%)とありぬ、殊に大都會にては專門家の數甚しく增加しだりと云ふ。

ロツクフエラー病院　昨年米國新納克市ロツクフエラー研究所附屬として設立せられたる病院は八層樓なるにも係はらず每に二三種類の病氣に罹れる病者のみを收容することゝ定められぬ、即ち研究所にて主ら研究せられつゝある疾病に屬する患者のみを收容する特別病院なり、而して醫員は一定の俸給を受け、決して自宅開業を許可せざる筈なりと云ふ。

內地雜報

各學會總會期日

來る四月以後、東京に於て開催さるゝ各學會總會期日の去る十日迄に確定せしもの左の如し。

△東京醫學會
期日　四月五日
會場　東京醫科大學生理學教室

△日本內科學會
期日　四月一日—二—三日
會場　東京法科大學卅二番教室

△日本外科學會
期日　四月一日より三日迄
會場　同法科大學卅番教室
宿題　全身及局所痲醉

△日本耳鼻咽喉科學會
期日　四月二日—三日
會場　東京醫科大學法醫學教室

△日本眼科學會
期日　四月二日—三日
會場　東京醫科大學眼科學教室

△日本皮膚科學會
期日　四月四日—五日
會場　東京醫科大學東大講堂
宿題　(一)濕疹の原因及療法。(二)膀胱疾患。(三)遺傳梅毒。

△日本神經學會
期日　四月四日
會場　東京醫科大學法醫學—生理學教室
宿題　痲痺性痴病

△傳染病研究所同窓會
期日　四月四—五兩日
會場　赤阪三會堂

△日本產科婦人科學會
期日　四月五日—六日
會場　東京醫科大學東講堂

△癌研究會

今日の處期日幷に場所は未定なるも、右學會中の日を卜して醫科大學構內に於て開催の筈。

北陸大學設立建議案

衆議院議員戸水寛人、杉田定、上野安太郎、井上敏夫、山際敬雄、米田穰の六氏は左の建議案を提出して通過せり

我國夙に東京帝國大學の設けあり而して後京都帝國大學を立て輒近又東北帝國大學及ひ九州帝國大學の建設を見るに至れり然れども人知は開發の點より之を觀れば帝國大學の數尙ほ未た足らざるを覺ゆ依て北陸帝國大學の設立を建議す

該建議案は實に時機に適したるものにして北陸地方一個の大學を望むや久し近來東電の報する所によれば該案は衆議院委員會を通過せりと此上は一日も早く議案として本舞臺に現出せられ北陸の野に此最高學府の建立さら

れむ事を望むや切なり。

●新博士學位申請論文題

去二月二日新たに學位を授與せられたる、四氏が提出せし申請論文は左の如し。

東大生理助教授　永井潛

一、冬眠動物の代謝生理(獨文)

一、纖毛上皮細胞の窒息及麻痺酵(獨文)

東京井上眼科病院　井上達二

一、視中樞の銃砲創に因しる視機障害(獨文)

一、中心靜脈の閉塞兼緣內障の一例及評論(英文)

一、網膜剝離の動物試驗的及び組織學的檢査(英文)

東大內科助手　土屋岩保

一、歇斯埃里性熱に就て(邦文)

一、稀有なる男子大歇斯帝里の一例(邦文)

一、再び稀有なる男子大歇斯帝里に就て(邦文)

一、新寄生蟲病たる日本住血吸蟲病に就て並に其病原蟲及本邦各地に於ける地方性存在に就て(獨文)

一、惡性貧血の病理補遺(獨文)

一、燐ウオルフラム酸による一新蛋白容積測定法に就て(獨文)

一、再び燐ウォルフラム酸による蛋白容積測定法に就て(獨文)

一、大人尿便中に於ける溶解蛋白の發現並にビューレット反應に因る該蛋白鑑識法に就て(獨文)

一、人に於ける馬尿酸構成の程度に就て(獨文)

大阪高醫教授　水尾源太郎

一、所謂特種性顆粒性結膜炎ゴールドチーヘル氏及び丘疹性顆粒結膜炎に就て(獨文)

一、一種の內視現象に就て

一、「ペスト」に於ける眼變狀に就て(獨文)

一、眼窩畸形腫の一奇型(眼窩內の胎兒—寄生性眼窩癒着双胎(Orbitopagus Parasiticus)獨文)

●陸海軍醫藥劑官現在數

去る一月一日の陸海軍現役軍醫官及藥劑官各階級現在數を調査するに左の如し。

△陸軍

軍醫總監	一人	軍醫監	六人
一等軍醫正	十五人	二等軍醫正	四十人
三等軍醫正	百〇三人	一等軍醫	四百十六人
二等軍醫	三百〇八人	三等軍醫	百八十八人
一等藥劑正	一人	二等藥劑正	一人
三等藥劑正	七人	一等藥劑官	卅三人
二等藥劑官	四十六人	三等藥劑官	廿人
合計軍醫	千七十七人		
藥劑官	百〇八人		

△海軍

軍醫總監	七人(內二名待命)	軍醫大監	十二人(內三名待命)
軍醫中監	四十三人	軍醫少監	六十五人
大軍醫	百十八人	中軍醫	五十六人
少軍醫	三十五人	同候補生	三人
藥劑大監	二人	同中監	三人
同少監	六人	大藥劑士	九人
合計軍醫藥劑官	三百三十八人 二十一人		

●日本青年の身長及体重

陸軍の調査によれば我國青年の身長

對体重大約左の如し。

五尺一寸以上、十三貫五百二匁。五尺二寸以上、十四貫〇五十匁。五尺三寸以上、十四貫五百三十匁。五尺四寸以上、十四貫九百五十匁。五尺五寸以上、十五貫〇卅匁。五尺六寸以上、十五貫八百六十匁。五尺七寸以上、十六貫三百九十匁。

越中富山の賣藥　盲千人の世の中鼻糞丸のて反魂丹の賣藥は漸次盛行越中富山に於ける斯業の狀況を見るに貼用印紙料廿一萬九千三百六十七圓、壹ケ年賣上高無慮參百二十餘萬圓、これに從事するものゝ數同縣に於て賣藥營業者八百四十人、請賣人一千五百十五人、全國に向ふ行商人七千六百四十二人、合計九千九百九十七人の多きを算すと云ふ。

西尾病院落成式　村上教授の前任者として本校病理學の教授たりし田中正鐸氏は本校辭職後郷里尾張國西尾町にて開業し後ち獨乙國に遊學して『ドクトル』の學位を受け歸朝後主として胃腸病の診療に從事せられつゝありしが此度病院を新築せられ去臘盛大なる落成式を擧行せられ知事郡長以下の祝詞大澤東大教授の演說あり式後岩瀨文庫食堂に於て祝宴を開かれ同地方には稀れなる盛況なりしと云ふ。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

醫校雜報

醫專校長會議の問題

醫專校長會議は例により來る四月中に開會する筈なるが、提出せらるゝ問題は第一は月謝値上問題にして、此問題は久しく各校長より希望せし所なるも、之による增收は直ちに各學校の改良費に充つる約束出來ざりし故に見合せとなり居りしを文部當局者も增收全部を學校の擴張改良費に支出する事としたるにより、愈々本年九月の新入學生より三十圓を三十五圓に値上げする事確定し既に本年度の豫算歳入に計上せられあり、之による增收即ち四年後には各校共二千餘圓の增收を、如何なる新事業に使用するか等に就き、各校長の意見を徵すべしといふ。

第二は學用患者費增加の件にして昨年の會議にも各校長より提議ありしが、其の理由は文部省より現在支出し居る患者費は久しき以前に定めたるものにして、今日の物價に相應せざる故增加の要ありと唱道し居れるも、文部當局者は、元來縣立の病院は施療を本旨とし、希望者ある際には有資患者を收容する事となり居れるに設立當時の規定不備なるが爲めに、現今の如く施療をソチのけにして居れるも、縣は當然施療患者費を支出して學用に供せしむべきなり。のみならず縣は專門學校の在るが爲めに間接に多大の利益を受け居るのみか、直接にも病院職員給を利し居れるなり、即ち若し縣が專門學校の教授の如き人物を職員に聘せんには、一人平均二千五百圓を給せざる可らず、假に臨床科五名とするも壹萬二千五百圓を要す、然るに學用に患者を供する爲めに專門學校の教授に依托するが故に僅か年

末一人三百圓乃至五百圓、五人としても二千五百圓以内の報酬にて立派なる臨床家に診療させつゝあるなり此點よりせば、縣は專門學校存在せる爲めに直接に一ケ年一萬圓内外を利益し居れるなり。されば宜しく其代償として學用患者費を支辨して可なり國庫より一文を受けず全部を負擔するも縣は決して損耗なき筈なるに、却つて國庫の支出を受くるのみか、物價を云々して不足など稱するは不都合の甚しきものなり。故に學用患者費の支出は現存の儘とし、其の不足なる分は縣に負擔せしむべしとの意見なり。第三には醫育統一問題にして、是は昨年の校長會議に文部當局者より諮詢せざるも、昨年是が前提として、各學校附屬の縣立病院改良問題を提出し意見を求め、其答申は全部到着せしも、文部省の希望に副ふ答申は極めて少く、此件に就きては校長等の意見を求むべく、然る上は之に關聯して醫育統一問題も議せらるゝに至るべしといふ。

第四は風紀取締問題にして年々議せらるゝ處なるが、近來社會主義、自由主義など勃起の傾向ある故、是等を防止すべき方法に就き協議すべしと、此他職員定員を增加するの件、留學生選拔に關する件等提出せらるべしといふ。されば今年の同會は昨年以上に多少議論を生ずる事ならんか、又各校長よりも、改良意見を上申する筈なりと。（醫海時報抄）

醫專校と醫化學講座　各官立醫專校に本年度より醫化學講座を設置する豫算は要求しあるが、金澤仙臺を除く外は教室の建築を要し且つ教授候補者に乏しき爲め、何れも來九月の新學期より直ちに關講する能はざるべしといふ。

宮城病院落成式　仙臺醫學專門學校附屬の宮城病院は同縣の負擔に屬すべき建築は、二月末日迄には全部落成すべきに就き、三月中旬には盛大なる落成式を擧行すべしと。

熊本醫專校建築工程　同校は昨年秋より改築に取掛りたるが、最早其の大半を終り、衛生及細菌學實習室は二月中に落成の豫定、又新に買入れたる病院の隣地約八千五百餘坪内に建築中の、解剖學教室及屍體貯藏庫、組織學實習室は、三月中に出來すべく、引續き解剖學教室本館、生理、病理學教室の建築に着手すべしと、全部落成を告ぐるは本年末なるべしと。

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

校内雜報

十全會講話例會（二月二十五日）

本校濟々堂に於て去る二月二十五日午後一時より開會鬼頭講話部長の開會の辭あり次で松原博士、特別會員ドクトル田上清貞氏及ドクトル河合鷹氏の有益なる講演ありき詳細は次號に記する所あらむ。

弓術射初式之記（二月十一日）

明治四十四年二月十一日紀元節の佳辰を卜して我弓術部に於ては本校舊外科教室に於て射初式を擧行したり、此日は高安會長村上部長を始め下平、

上田、宮田、高山、石川、鬼頭、阿部、加藤、脇坂、中島、林（常）、佐復、若林、川島、吉野、丸山諸先生、參會せられ大に盛會ありき、時間の都合上出技者を五名許とし、終て八島先生より弓術に關し一場の講話あり（別項に掲ぐ）次に茶話會を開き席上延川氏は本日多數諸先生の御來會及八島先生の御熱心を謝し尚此後の希望を述べて樂しく散解せるは午前十一時過ありき。

八島先生講話

本日射初式擧行に際し余に弓に關する講話を望まれ余は元々匹夫にして只事有時には馬前に斃るゝの覺悟を以て學びたるのみ弓と云ふ事に就ては素より別に考もなく古來よりの流名等を列序して其責をふさがんと思ふなりさて弓は太古よりありしものならんも當時は比較的彈力ある樹に藤蔓を張り矢も直なる樹枝竹と只先へやるのみなりしやに考へらる追々進むに連れ繼き弓なるものを考へ出せり之れは右太古の弓にては矢の勢ひ足らざるが故に樹幹の前后を竹にて狹み藤蔓にて卷き山蜘蛛の糸を以て弦とし之を万年弦と云ふ夫より追々進歩して終に當今の弓を製作するに至りたるなり而して又其流名には先づ

尊流　神道流　日本流

右は神より傳はりたりと謂ふを後人の稱したる名なるべし而して古は一子相傳とも云ふべきか其始めし人の名をして流名とせしものならん

○鹿島流

武甕槌の命に始まり鹿島神社祠官の傳へたるものゝ由武内宿禰も亦鹿島流の傳承者とし六朝に仕へ功績顯者なりしと

○八幡流

代々承傳し給へる神道流は仲哀天皇に至りて斷絶せり故に應神天皇は武内宿禰を師範とし弓道を合一せられたり之を八幡流と云ふ

○紀流

武内宿禰の後裔に紀勝長なるもの歩射客儀の師範たり之れ紀流の始祖なりと

○伴流

大同中の達人伴和武多丸なるもの射に功あるにより後代々伴氏の家業なり世人も亦紀氏伴氏をして弓馬の師とせりと后近浣能有公に傳へ能有公は貞純親王に傳へ給ふと云へり

○坂上流

坂上大國弓馬に妙を得其子孫大養、苅田丸、田村麻呂等皆達人なりしと

○良文流

此流は桓武天皇四世の孫村田良文より傳はるものゝ由

○秀郷流

此流は魚名の四男伊勢守藤成五世の孫鎭守府將軍秀郷より傳はると云ふ

○逸見流

源家の武將は八幡流なり就中義家の弟新羅三郎義光は達人なり其子義清も父に劣らざる達人なりしか甲斐の國青島西郡上野村に配流せられ逸見の冠者と號したるにより此れを繼ぐ者を逸見流と云ふ

○武田流

武田信義は逸見と共に弓道を究めしと云ふ此武田流に三派あり、甲斐の武田は信義直傳、若狹の武田は信豐より傳へ、安藝の武田は直信より傳ふ、又別に武田裏傳と云ふあり有信より傳ふと云ふ

○小笠原流

武田、小笠原は逸見と同じく源家の後裔にして流祖は小笠原信濃守貞宗とす貞宗後醍醐天皇より弓馬の師範たるべき勅諚を賜りたりと云ふ

○德大寺流

德大寺家の射道にして元逸見義胤より傳へたりと云ふ

以上を古流と云ふ

○日置流

日置彈正政家逸見流の祖刑部三郎義清が配流せられし時從ふところの一人あり政家の後裔日置政次陪々錬磨し終に日置流の名を發す此流後に二派とふる大和日置流、伊賀日置流

○吉田流

吉田上野介茂長后薙髪して道法と號す江劔藩生郡河森に住す弓術の達人あり其子茂賢幼時より射を好みたりしが適ま日置彈正政次訪ひ來りしを請し入れ之に就き奥蘊を究め後入道して一鷗と號す其子出雲守經茂露滴と號す之れ出雲流の始祖なり后ち代を經て左近右衛門茂方水友と號す之れ左近右衛門派の始祖とす茂方に三子あり長を左近茂武二を平兵衛茂本三を大藏茂氏と云ふ共に加賀藩に仕へ明治雛新の后まで連綿弓術の師範を以て任とす

出雲派　吉田出雲守入道露滴を派祖とす

左近右衛門派　茂賢四代の孫助左衛門光雄入道道春の男左近右衛門茂方水友と號す之が派祖にて秀次公に仕ふ

助左衛門派　助左衛門光雄は出雲入道を派祖とす

山科派　片岡平右衛門家次を開祖とす

雪荷派　六左衛門入道實房雪荷と號す經茂の弟なり之を派祖とす

道雪派　伴喜左衛門一安后ち道雪と改む右雪荷の高弟あり

印西派　葛卷源八郎重氏は近江の人吉田出雲入道光雄の女婿あり后吉田久米之助印西と云ふ

大藏派　吉田流始祖の條の如し

大心派　田中太郎兵衛正次大心と云ふ伴道雪に師事し一派を起す

○安松流

應永の頃日置政次伊賀ありて伊賀日置流出づ其門弟安松左近一流をおす

○弓削流

弓削彌六郎勝次安松左近の子新次郎良清より傳ふ子孫ふきにより弓書を三島明神に納むと

○竹林流

石堂竹林坊は如成と號す三島明神の夢想により弓削が納めたる弓書を得て一流を興す后尾張に住すと

尾張竹林派　星野勘左衛門茂則竹林坊より傳へて一派をおす

紀州竹林派　吉見臺左衛門竹林坊より傳へ一派をおす

○針野流

日置氏印可の弟子にして吉田茂賢に中て拳の傳を得て一流を興す

○淵上流

淵上河内守日置右馬允より奥儀を傳へ一流を成す

○松本流

松本民部少輔は吉田茂賢の末子重貞松本氏を襲ぎ一流を成す

○應心流

流名は古書に見るも其傳記不詳

○日置家定流　仝上

○日置正豐秀古流　仝上

○片身流　仝上

○大和流

森川香山觀德軒と號す日本諸流の長所を取り一流を起したりと

○太子流

若狹の人坪内寸次郎は元紀州竹林派に學ぴたりと此人強弓を好み常に一寸の弓を射しより時の君公より寸次郎の名を賜りたりと聖德太子若述ふりと云ふ書に依りて奥蘊を究め流名を太子流とせしとふり

以上夥多の流派はあるも其至るところは一ならんと思はる而して隨分名流派には困難ふる式法あり我吉田流は前に述べし如く加賀藩の師範家吉田左

近、平兵衛、大藏三氏は軍用專一とし工夫鍛練したるものにて時宜に依る次第と云單簡なる武法の外はなし只已れを正す事に重きを置き戰場の用をのみ盡すことを肝要とせり併し已れを正すと云ふも其曲直は自已に斷し難し其曲直を知るの定規の必要を生ず此定規には則ち手前の書と云ふ二十七條よりなる書を以てす凡そ武術は觧學により心氣の鍛練をなすなり併し如何に心氣を錬るも茲に誘惑なる惡魔のために不知不識の間に其曲をなし曲とせざることあり近くは先づ競射をなして其賞品を得んとする如き則ち是なり故に生徒諸君は弓術のみに止まらず已れを正すと云ふ事に留意せらるべし終に臨みて古人の歌一首を朗讀し此意を得て以て能く鍛練せられんことを希望す。

なるこをばれのか羽風にうこかせて
心と　さわくむらすゝめかな

＊　＊　＊　＊　＊
＊　＊　＊　＊　＊

通信

●豐橋同窓會通信

（松原雜誌部長宛一月十九日着）

舊臘十七日午後五時より豐橋市板新道松米樓に於て附近在住會員の忘年兼懇親會を催す集まるもの九名舊を語り新を談じ各自胸襟を披きて十一時過散會す附近在住の同窓左の如し（卒業年次順）　（渡孚貞氏發）

渥美郡田原町田原病院長　渡　孚　貞　三一年卒業
騎兵第廿六聯隊附一等軍醫　關口通太郎　三三
歩兵第十八聯隊附一等軍醫　永井學造　三七
第十五師團司令部附二等軍醫　谷澤一郎　三八
北設樂郡御殿村開業　中野源一　三八
豐橋病院醫員　原　久雄　三九
仝　上　大野留次　四一
豐橋市河合病院醫員　莊田芳根　四一
騎兵第廿五聯隊附三等軍醫　齊田猶次　四一
歩兵第十八聯隊附三等軍醫　中谷內善雅　四一
歩兵第六十聯隊三等軍醫　北村一清　四二
騎兵第廿六聯隊附三等軍醫　寺境壽貞造　四二
歩兵第十八聯隊見習醫官　竹松常雄　四三
仝　上　坪倉利　四三
仝　上　山科他喜雄　四三
仝見習藥劑官　岡本寛　四三

●京都校友通信

（雜誌部宛）

蕭啓諸兄愈御健全大賀の至りに候却説京都にある吾等同窓は數年來とんと團欒の期を得ず何んだか心淋しく思ひ居りしが昨秋島田君新潟醫專へ赴任の榮を得られたるを期し第一回母校同窓會を祇園中村樓に開きしより本年又中川君軍醫學校に入校せらるゝに付き去月廿六日第二回同窓會を催し候第一回には漸く八名なりし本會は今や十七名の多きに至り候

勿論此の會合は社交的義務的のものにあらず同窓欽慕の情の產みしものなれば痛絕快絕なりしは云ふまでもなく其の友情を暖むるに於て意義ある會

合ふりしことを深く覺ゆ候は御地以外の會員諸君は御同感の御事と存ず候

當地の會員は

新宮川町五條上ル	産婦人科	開業	宮橋行隆	甲醫
大黒町五條		開業	橋本喜久三	三二
醫科大學解剖學教室			岡島敬治	三四
醫科大學醫學教室		ドクトル	加藤寛	三六
煙草專賣局京都製造所			久保襄一郎	三七
下鴨村		開業	鴨脚光榮	三八
醫科大學耳鼻咽喉科教室			内田貞春	四〇
醫科大學法醫學教室			名取博三	四一
御幸町錦小路上ル耳鼻科		開業	大原米二郎	四一
歩兵第三十八聯隊		軍醫	中川善松	四一
歩兵第三十八聯隊		軍醫	吉川友信	四一
醫科大學内科教室（中西博士）			清水義成	四二
濟生病院			梅澤亮吉	四二
歩兵第三十八聯隊	豫備見習醫官		久保勝次	四二
歩兵第三十八聯隊	見習醫官		角田眞一	四三
歩兵第三十八聯隊	見習醫官		辻口文吉	四三
歩兵第三十八聯隊	見習藥劑官		牧野新之亟	四三

（卒業年次）

の諸君に御座候尚當地は閑靜にして空氣清く又研究其他諸種の点に於ても京大は東大に決して劣らぬのみか却て種々の点に於て吾々に利益多きかと思はれ候

幸に諸君の健全と御奮勵とを遠く祈り居り候

小原芳雄氏の遠逝を深く吊り申候　匆々頓首

編輯部諸君御中　　名取博三

●日野信次氏通信　（松原教授宛）

十全會雜誌其都度拜見仕り候小生ぶらり〳〵墺國の行脚に出掛け本日Salzburg に到着歐洲の毛唐が八釜しく云ふ程の景色にも無之只 Salzburg Alpen 丈の雪景色が氣に入り申し候住民の培加せる外國人市内に充滿せり物價は金澤の十五倍金が吹き飛ばす程費るには閉口致し候十日計りの後ウ井ンに出掛る豫定に御座候度々十全會の萬歲を祈り奉候餘は後便にて

●松久祐馬氏の通信　（松原教授宛）

拜啓益々御多祥に御起居相成居候赴奉大賀候陳ば過日は御丁寧なる賀狀を賜はり厚く御禮申上候小生義無事超歲し勉學罷在候間乍憚御休神被下度候今更改めて申上ぐる迄もなく既に貴下の御承知有らせらるゝ事のみにて年を重ぬるに從ひて見かれたるにや聞きかれたるにや一向眼あたらしき事も無之只彼の六〇六號の盛に試用せられ居る一事のみに候當大學にて靜脈内の注入の主に行はれ居る樣に候當地は目下 Cöln に於て行はるゝものと双び稱せらるゝの Carnival 既に約一ヶ月來開かれて夜にても一寸散歩すれば Maskiert したる男女を見受くる事屢々有之候若しそれ Bal-Bare のある劇場將た大なる Beer-Bräue にては盛んにかゝる異性のものどもの Tanz に熱中し居る由に候小生も昨年參りしが余り面白くもないので今年は未だ行きません遠く貴下の御健康を祝し申候

Dr. Y. Matsuhisa.
Waltherstr. 17, II.
München.

加藤錠吉氏通信

（福田美明氏宛）

其後は暫らく失禮仕り候極寒の候貴兄益々御壯榮慶賀の至りに有之候諸國修業の身に有之候へばまた此頃住み馴れし金城を後にして浪華の里に赴きしも今又花の都に笈を負ふ事と相成候然し腕は一向に鍛はれず是では長崎迄行くもとてもかたきは討ち兼ぬるものと存じ居り候、松原先生に宜敷願上候

同氏通信

（福田美明氏宛）二月十三日着

拜呈追々と寒氣薄らぎ候所益々御多祥慶賀の至りに候先日御祝詞玉はり難有候金澤も最早や雪は消え去りし事と存候當地も梅はちらほら笑ひ初め候同期卒業生では只今當學生とふるもの伊藤、梅岡、宮村、中川及小生の五名に有之候其他先輩の諸官は多々有之候又辻井、河崎の兩氏は井上眼科病院に居らるゝ由に候。

加藤氏は四十一年度卒業後歩兵第七聯隊附ありしが昨年大阪衛戍病院に榮轉し今回亦撰ばれて二月一日軍醫學校に入學せらるゝに至りしより願はくは精勵一番大に勉められむ事を望む終りに在校同窓諸氏の健康と幸福を祈り候

井村勇作氏通信

（福田美明氏宛）

御手紙拜見仕り候貴兄其後愈々御健康にて益々御研究之由誠に喜ばしく御座候皆々樣血清反應試驗中の由アルゼノベンツオール御注射の目的と推察致し候既に其注射も御試み遊ばされ候事と存じ候其成蹟及其病種は如何ふるものに御座候や小生は最早六〇六號に對する興味を失ひ申候今迄小生の試みし例に見るに精神病及び腦脊髓の疾患に對しては著効無之候樣に見受けられ候只だグンマに依りて來りし「エピレプシー」に對しては著明ふる効果を呈し申候麻痺性痴呆病には寸効もふく反て有害に作用せし數例を實驗致し候其一例は極めて初期の Paralyse にして注射後二週間は稍快方に向ふが如き樣子も見ゑ候處突然 Paralytische Anfälle を來し候尚一例は第二期の Paralyse（若し Paralyse の全經過を初期二期三期と別てば）にして注射後一週餘にして直に第三期に進み彼が抱ける誇大妄想は極り無く誇大とふり其迄は彼が地方に於ける富豪と稱せしが俄に大宇宙の支配者と變じ申候其他の例に見るに Paralyse に對しては Positive に作用せさる樣に候此事は既に昨年十二月八日發行の Deutsche medicinische Wochenschrift の二二八四—二二八六頁に Oppenheim 氏も申し居り候事は御存じの通りに候尚脊髓疾患に對する一二例を申上ぐれば梅毒性 Basis の上に表れたる腦脊髓多發性硬化症性症狀を有する疾患に對して試みしに注射後一週間は四肢に來れる放散性疼痛消失致し且つ頭痛もふくふり申候處其後再び表はれ申候是等の輕快は只六〇六を注射したといふ觀念によりて來る一種の Psychische Täuschung に御座なく候やと疑はれ候またオペンハイムの報告に依ると一 Tabes 患者に六〇六を注射後膝蓋腱反射が喪はれたるを注意せるに其は患者の故意に出しものふりし事を知りし由に候小生の一例の Tabeker は注射後一週間にして彼が數年間苦しめられし Lancinierende Schmerzen は忘れたるが如くに相成り候とて非常ふる喜びを以て退院致し候所後間もふく再び元の如く惱み居るとの非常ふる失望の手紙を送り來り候現に有せる一例は Luetische Basis に來れる輕度の Brown-Séquardsche Erscheinungen に對して試み申候處一週後より自覺的に稍輕快しつゝある如く候へ共他覺的に何等の變化を認め申さず候、要するに我中樞神經系統には六〇六と緣の遠きものゝ如くに思はれ候勿論最初に泰氏よりも Metasyphilis に用ゆる事を望まれ申されざりし樣に候小生も入營すべく來る廿三四日頃に歸省致すべく候に付其後に御面會の機を得候は

〻共に相語りまた御地方に於ける事共も承り度候。

松原先生始め石川君其他の方々に宜しく御傳言被下度候。

氏は四十二年卒業後松原博士の下に研究後東京の山田鋏藏博士の經營せる大久保腦病院に轉任し專ら精神病及中樞性神經に就て研究診療中なるが近々歸國邦家の干城として入營せらるゝ筈益々健康最大の義務を果し學會に立たゝるゝの一日も早からん事を祈り候

●大西瀨治氏通信

（橋本喜久三氏宛　松原教授宛轉送）

拜　復

寒威益相增候處先以て貴家皆々樣愈御清榮之段珍重奉欣賀候却說今回の進級に就き早速に御祝辭を賜はり誠に難有厚御禮申上候致て自愧を申上候譯には無之候得共實際今頃進級ある者とは乖て少しも期せざる處にて到底本年十二月迄は不愉快なる日月を送る次第と萬事斷念致居候處不計此恩命に接し實に夢の樣に感し申候特に小生は最初出身の際不成績なりし爲め今尙小生の順序迄には十餘名の先輩者在り假に本年三月頃進級者あるも到底小生の邊迄は來る可し共思はれず大に悲觀致居候處に此際八名程の先輩を追越して進級致し只從來海軍に於て先例なき時期と云ひ又軍醫官としては之も先例なき拔擢を行ひたる次第にて小生も十數年來の不面目を恢復すると共に軍醫部內及部外者に一の注目と驚愕とを與へたる譯故實は內心大に愉快に不堪候然處今回の進級と同時に舞鶴海軍病院附に補せられ鈴木軍醫中監（寬之助）の後を受くる事に相成英國行の方は御免を蒙むり申候か今回の英國行の如き重大任務を有する處には小生の如き出來立ての軍醫少監にては幅かきかぬ故是非古參者の內より名士が乘艦の事と兼て期〻居候處愈事實として古參軍醫少監と交代致候然し此交代は小生一身上に取ては誠に難有仕合せにて小生も昨年病氣以來兎角健康不勝其上本年一月六日より痢要儀又例の心臟衰弱症にて就蓐罷在候爲め若し此儘に小生が乘艦致居候樣事ならは引入にても致されは成ぬかと心配致居候處故是にて大に安神仕候次に鈴木中監は今回鞍馬軍醫長として英國に行かるゝ事に相成候が同氏も昨年は少尉候補生の遠洋航海に行かれ本年又引續き外國行と申す譯故誠に御苦勞樣と存候得共今回の行は鈴木中監程の名士ならずば他に勤まる人が無き故と存し同氏の爲めには大に祝すへき事と存候

次に本月末或は來月上旬頃舞鶴に赴任致す考に御座候が是よりは貴兄の方と大に近く相成候に付四月頃好氣候の節には又御邪魔を可致候間何分宜敷御願申上候但し先般の如く御馳走の御心配被下候樣な事は只今より御斷申上置候夫に關せず若御馳走被下候とならば訪問取止めに可致候先者御禮の爲め一筆如斯御座候余は重便匆々

一月二十一日　　大西瀨治

喜久三樣

●韓清泉氏通信

（松原教授宛）

拜　啓

新春之の節益々御壯健のと奉賀候此の度先生の御はがきを拜讀仕り且謝且愧小生歸國後は公私事に忙殺されつい〻御無音に打過御仁恕可被下候小生等は元より初めに病院學校の創設に着手せんとして本省の省議會に全省醫事機關建設と云ふ建議案を提出し一方には當地有名なる貴紳により上級官廳に運動せし處計畫甚大の爲め到底目下財政困難を呈せる本省に於ては其支出を許さざる故種々調査の上にて始めて大局を定め省會の方は勿論全体一致を以て贊成し殊に貴紳の助力を得て著しき大効を奏せり目下の處ては先に臨時病院を開くと共に新築工事に着手することに定めり

又醫學校の方も愈々今春にて新設することになり新築せん前には貴國の先

例に仿ふて浙江高等學堂に醫學部を附設し將來漸次擴張法を行ふ豫定あり（或ひは機會に臨んで大ふる「メタスターゼ」を作るやも知れず）時丁度各方面共に發展する時に際して豫算上意の如くにあらざりし故一時に寄生することは亦已を得さる所ふり小生等は母等を離れてより未幾何未だ何等の經驗を有せず而して大胆に全省醫事機關を創設せんとする小生等恐懼の情は實に堪へざる所ありき幸に湯君は政治界に大ふる勢力を占めて一般の人士に稱賛せらる東京の山根（數年前の）？將來のウイルヒョー？と目される厲君も四川省の軍醫部長に受職せずして秋頃母地に歸られ其の人たるや又大に交讓の美あり今回の病院長推薦についても皆小生を推擧せり然し一歩退つて考へるに小生は學たらず識たらず才たらず器も其の人にあらざれば其の樣ふ大任を果して完ふすると出來よーか自らも疑て居ります小生は唯努力而已勉強而已耳目でマア見習として假授職そして醫學部の主任は高等學校長は湯君の兼任を依頼せし處湯君は固辭して厲君に讓り目下尚未定尚將來學術上に關することは諸先生に教訓を仰ふ處多いと思ふ故其時御煩勞を憚らんことを願ひます

大畧のことは以上の如し詳細のことは東渡の節面談。終りに臨んで先生並に諸先生諸學兄の御健康百益を祈ります　早々頓首

亥年正月十五日　　在抗州　　韓清泉

松原先生閣下

當地此頃の氣候は常に二三度上下最低度は零度の時もあり冷い風は余り吹かず小生元氣不惡、再白

韓清泉氏は四十一年本校を卒業し後ち金澤病院外科第二部にありて外科を專攻し今や故郷の清國に歸りて醫學校を創設し以て其の理想と手腕とを實現せんとす其快や大ふらん

入事

○田中講師と紀念品

永々本校講師として外科總論皮膚花柳病學講座を擔任せられし所舊臘同囑託を辭し專ら金澤病院外科一部首席醫員として患者の診療に從事せらるゝ事とふりしに就いては同門下生たる學生及在澤卒業生等相計り紀念として銀製銚子一對を寄贈する事に決したりと云ふ

○伊藤哲一氏と恩賜の時計

陸軍三等軍醫伊藤哲一氏は四十一年度に於ける本校醫學科首席卒業生にして直に見習醫官とふり第九師團に入り三等軍醫に昇任するや全國軍醫の筆頭とふり大に母校の名を擧げたりしが其後輜重兵第九大隊附となり間もふく推されて軍醫學校に入學せしは昨年ふりしに亦もや最優等の成蹟を以て恩賜の時計を拜受するの光榮を得引續き同校留學の好運を擔ふに至れりの如きは實に母校の花にして亦人生の譽と云ふべし願はくは天與の才を發輝すると共に益々攝養自重大に他日に期せらるゝ所あらむ事を望む終りに氏の健康と幸福を祈るや切ふり。

○笠間眞氏

全氏（舊名笠間大作。二十四年卒業）は卒業後陸軍々醫とふり一等軍醫まで昇進して辭職し後ち順天堂病院に入りて外科を專攻すること十年間實地經驗を積まれたるが此度同病院を辭して東京日本橋區檜物町に自宅開業せられたり吾人は全氏の成効を祈りて止まず

○鈴木寛之助氏

（二十九年度）海軍々醫中監の氏は今回本職及兼

職を免じ同時に鞍馬軍醫長兼横須賀海軍工廠艤裝員に補せられたり却説同鞍馬艦は英皇戴冠式參列の爲め東伏見宮殿下を奉じて渡航するものにして同艦の軍醫長に補せられし氏の名譽は獨り氏のみに非ず實に本會の光榮とする所なり。

○中野才幸氏　（三十一年度）海軍々醫少監の氏は一月九日附を以て吳海兵團附を免じ筑波軍醫長に補せらる

○大西瀨治氏　（三十二年度）今度海軍々醫少監に昇任せられ同時に舞鶴海軍病院附に補ぜられたり。

○太田長作氏　（三十五年度）陸軍一等軍醫の氏は三十七八年戰役衛生史編纂委員を命ぜられたり。

○田中義雄氏逝去　明治三十九年本校卒業後埼玉縣比正郡小川町に於て醫術開業中の所去る四十二年中に死去せられたりと春秋尙ほ多き身を以て突然逝去せらる痛惜の至りなりとす茲に會員を代表して吊意を表す

○本會員軍醫學校入學者　去一日を以て選ばれて陸軍々醫學校へ入學せられたる諸氏は左の如し願はくば邦家の爲め大に努力せられむ事を望む

松井源長氏（三八）、鈴木修一郎氏、赤尾筆三氏（以上四〇）、伊藤哲一氏加藤錠吉氏、梅岡孝三氏、宮村誠一郎氏、中川善松氏（以上四一）、笠松彦次郎氏（四二）、

○富田直氏　（四十年度卒業）卒業直に上京宇野博士に從ひ東京樂山堂病院にて外科及泌尿器科を研究餘暇を以て朝倉文三博士田中友治博に從ひ泌尿器科學を研究し明治四十三年五月鄕里福井市元末町にて富田敦貴氏と共に開業若越二洲にて泌尿器科專門にて膀胱鏡を使用せしは氏を以て嚆矢とす。

○福村深毅氏　（四十二年度）今回內科一部研究中近々開業せらるゝ考かりと

○關承吾氏　（四十二年度）卒業後內科二部醫員奉職斯學の研究中の所今回入營せらるゝ爲め去る十六日當地出發歸國せられたり願はく壯健に義務を遂へられむ事を。

○田山退一氏　（四十二年度卒業）卒業後市內淺野川病院醫員奉職中一月職を辭し東都の各病院を視察して近々中鄕里福井にて開業せらるゝ由

○吉田圓磨氏　（四十三年度）婦人科研究生たりし氏は今回同科醫員を拜命せらる氏は在校中本雜誌部委員として達文妙筆を以て屢次會員に見えしの人今後益々本會の爲め盡力せらるゝ筈かり。

○謹吊池部正鑒氏　（一月廿八日沒）

春陽の氣宇宙に滿ち、月に陳りし梅花將に笑はむとするの時、一陣の北風あはや咲き懸けの花を盜みて去りぬ、噫、無情なる哉

池部氏名は正鑒雨橋と號し、夙に本誌委員として椽大の筆を振ひ、陸離の文彩を放ちしに、今や逝きてなしと聞く、君や資性溫良人格崇高、文筆に長し、歌に詩に無限の才を吐露して世人の推重措かざりし所、四十一年校門を辭せし以來專ら靜養他日大に雄飛せられむとせしに、空しく白玉露中の人となられしとは、實に痛恨の極みなりとす、茲に哀悼の辭を捧げて謹で吊意を表す。

會告

○自明治四十三年十二月廿九日至明治四十四年二月十七日校外十全會費納付調書

金額	期限	氏名
金參圓	自四十三年度至四十五年度三ヶ年分	山本重親君
金五圓	自四十四年度至五十年度七ヶ年分	神坂勇治君
金參圓	自四十五年度至四十九年度五ヶ年分	稻坂清八君
金壹圓	四十四年度分	神谷貞次郎君
金參圓	自四十三年度至四十五年度三ヶ年分	堂坂友作君
金參圓	仝	日下辰吉君
金壹圓	四十四年度分	岡田虎介君
金參圓	自四十五年度至四十七年度三ヶ年分	鈴木正孝君
金參圓	自四十三年度至四十七年度五ヶ年分	大藏關重君
金參圓	自四十一年度至四十三年度三ヶ年分	都築能藏君
金參圓	自四十三年度至四十七年度五ヶ年分	澤賢吉君
金參圓	自四十五年度至四十七年度三ヶ年分	岡久雄君
金參圓	自四十三年度至四十七年度五ヶ年分	堀井吉平君
金五圓	自四十二年度至四十八年度七ヶ年分	酒井政吉君

以上

次號雜誌發行

四月二十五日

次號原稿〆切

三月十五日